仏教学教育法の研究

長崎法潤　吉元信行
木村宣彰　小谷信千代
一色順心

はじめに

近年、大谷大学においては、以前に比べて学生数も増加し、それにつれて、寺院出身学生に対して在家出身学生の比率も多くなり、さらに偏差値による輪切り現象などで、学生の仏教あるいは仏教学に対する考え方もずいぶん変化してきた。学生の中には、仏教は古い過去の遺物であると考えたり、仏教を学ぶことの意義を見い出そうとしない者もいる。

本学仏教学科の教員は、仏教学科の授業だけでなく、全学科の学生を対象にして、仏教学的視点から、本学の建学の精神を啓蒙するため、以前は「仏教入門」や「総合II」、そして現在は「人間学Ⅰ」という講義を担当している。

そのような中で、本学において行われている仏教学関係の講義は、教員の側から一方的に知識を教えるという教育方法に片寄り、現在の新しい学生に対して充分な教育効果をあげていないのではないかということが指摘され始めた。そして、平成2年、大谷大学文学部仏教学科会議において、このような反省に立って、一刻も早く新しい教育方法を導入すべきであるという共通認識に至った。

これまでの、主として文献に基づく教理、思想を中心とした教育は、現代の多様化しつつある学生のニーズおよび思考形態を考えてみた場合、このような教育の方法では充分に学生に効果があるとは思えないとの反省である。したがって、そのことを打開するための新しい教育方法の開発は急務である。たとえば、オーディオ・ビジュアルの教材を使用した教授方法とか、あるいは、学生のニーズに応じた講義内容・テーマの設定などが当面考えられるであろう。しかし、それにもまして、大谷大学建学の精神に基づく旧来の大谷大学仏教学科の伝統と願いを大きく逸脱してはならないという学問としての良識も要求されることになる。

そのために、仏教学科内の専門分野を異にする教員が、それぞれ学際的な立場に立ち、まず、学内外の多くの識者に意見を聴取するとともに、国内の宗教系諸大学の教育状況、外国の大学の宗教教育の資料、あるいは内外学生の動向を精力的に調査するなどして、仏教学教育の効果的な方法論について検討し、新たな展望を見いだすことが必要となる。

そこで、仏教学科教員の強い要請によって、学科内のわれわれ５人の教員が選任され、平成３年度の大谷大学真宗総合研究所共同研究を申請することになり、同研究が許可された。さらに、平成４年度も継続研究が認められ、２年間にわたって、主につぎのような課題によって、この研究を遂行した。

１．国内、国外の宗教系大学における仏教学教育の現状についての調査および資料収集とその分析

京都、東京、名古屋、大阪の宗門立大学を各研究員が訪問し、仏教学関係のカリキュラムや教授方法について調査し、資料を収集した。また、仏教学関係の講座が開設されている国立大学や外国の宗教系大学のカリキュラムについても資料を収集した。

月に１～２回の研究会において、これらの調査結果や資料を分析し、本学に参考になる部分についての検討をした。また、各年度に１回、他大学の仏教学関係学科の再編成などに関わる教員を招聘し、研究会を持ったり、研究員全員が他大学を訪問し、関係教員たちとの懇談会を持ったりした。社会の国際化と情報化にともない、多くの大学は学科の改組の問題でいろいろ模索していた。他大学に関する調査内容や資料については公表を差し控えたい。

２．各種視聴覚教材の収集と教室での活用方法についての研究

本学でも最近、ＬＬ教室、ＡＶ教室、情報処理教室などが整備されてきたので、授業において視聴覚教材が容易に使用できるようになった。本研究では主として上記の研究目的に従って、教室で活用し得るビデオ教材の収集に務めた。そして、各研究員が観賞したり、教室で使用したりして、活用の有効性について検討した。その結果、有効と認められたビデオ教材の目録、および、その内容と活用方法についての視聴覚教材カードを作成し、研究終了後も仏教学科の教員がいつでも使用できるように整理して、ビデオ教材を保管することにした。

3．仏教学教育における学生の海外研修の活用

本学においては、平成２年より、第一研究室と短期仏教科研究室が中心になって、全学科を対象にしたインド仏跡研修が行われるようになった。平成２年度は、われわれの中から長崎、吉元研究員、平成３年度は吉元、一色研究員が研修旅行に引率者として参加した。この研修を仏教学教育に活用する方法について調査研究をし、研究会において検討した結果、このインド仏跡研修は仏教学教育において特に有効であるとの結論に達した。この成果の一部については、すでに吉元研究員が『仏教学セミナー』54号において、「インド研修•出会いの風光―第一回大谷大学インド研修旅行報告―」、また、平成３年12月に大正大学で開催された第１回仏教教育学会学術大会において、「仏教学教育法における海外研修の活用」と題して報告し、その発表要旨を『日本仏教教育学研究』第１号に発表した。これらの研究成果の詳細、およびアンケートの集計、学生の感想文、研修旅行の活用方法について、本稿で報告することにする。

われわれは以上のような研究を通じて、学生が仏教の学びに興味を抱くようにするためには、いきなり仏教の教理から入るよりは、仏教の文化に触れる機会を与えることが必要であることを痛感した。そのための効果的な方法の一つとして、ビデオなどの視聴覚教材の活用が必要である。さらに、仏教の学びに感動をもつ機会を設定することも大切である。インド研修旅行に参加した学生は皆、ブッダがここで覚られた、ここで教えを説かれた、というその大地を自分が踏みしめ、そこで大きな感動を経験している。それは、何ものにも代えがたい体験である。それは、仏教の学びに大きな意味を与えてくれるものである。

以下、次のような目次で本共同研究の報告とする。

Ⅰ．視聴覚教材の収集とその活用方法
　［１］　視聴覚教材の収集
　［２］　視聴覚教材の活用方法
Ⅱ．ミシガン大学の仏教学教育法
Ⅲ．仏教学教育としてのインド仏跡研修
Ⅳ．インド仏跡研修の活用方法
　　――感動体験を教育に生かすために――

Ⅰ．視聴覚教材の収集とその活用方法

［1］　視聴覚教材の収集

従来、仏教学は、文献にもとづく教理、思想、歴史を中心にした授業が行われてきたが、近年、授業の内容によっては視聴覚教材の利用がなされてきている。その場合、教員個人で入手した教材を利用している程度である。仏教学の授業で活用できる教材にはどのようなものがあるか、われわれも充分に把握していないのが現状である。そのうえ、研究室などに教材が揃っていないので、適切な教材を選んで利用することもできない。

仏教学科の教員が視聴覚教材を積極的に活用するためには、まず、教材を収集し、利用できるように整理しなければならない。そこで、本共同研究では視聴覚教材ビデオの収集に務めた。収集した教材ビデオには市販されているものだけではなく、テレビからの録画も含まれている。収集した教材に分類番号をつけて整理し、下記の一覧表を作り、それを仏教学科の教員に配布して利用できるようにした。なお収集した教材は長崎研究室に保管することにした。

視聴覚教材

教材ビデオ・カード番号

番号は分類記号*、通し番号、国名からなる。

例）　釈尊物語　　B　－　００１　　（インド）

（分類記号）（通し番号）（国名 or 地域名）

注）　分類記号は、そのビデオの内容の主だった分類ひとつを選んで付ける。

＊分類記号

仏教……B	宗教（仏教以外）…R	哲学……P
芸術……A	文化……C	ホスピス……H
医学……M	民族学……E	その他……Z

注）分類記号は必要に応じて増やす。

視聴覚教材ビデオ

釈尊物語	B-0001（インド）
お釈迦さまの足跡 1	B-0002（インド）
お釈迦さまの足跡 2	B-0003（インド）

ＮＨＫスペシャル　大英博物館　第５集 流砂に消えた秘宝―中央アジア・文明の十字路―	Ｃ-0004(中央アジア)
ＮＨＫスペシャル　大英博物館　第４集 姿なきブッダのかたち―インド・仏教美術の源流―	Ｂ-0005(インド)
Etv. 8「アジアの伝承医学―中国・インド比較リポート―」第１回　人間は小さな宇宙	M-0006(中国、インド)
Etv. 8「アジアの伝承医学―中国・インド比較リポート―」第２回　自然から贈られた薬	M-0007(中国、インド)
放送大学ビデオ教材　民族学への旅　①中央アジア	Ｅ-0008(中央アジア)
放送大学ビデオ教材　ガンダーラ―文化の受信と発信―	Ｂ-0009(インド)
インドこころの旅　第１巻 哲学者 中村元　ブッダ最後の旅路をゆく	Ｂ-0010(インド)
インドこころの旅　第２巻 哲学者 中村元　ガンジスに輪廻転生を見た	Ｐ-0011(インド)
インドこころの旅　第３巻 哲学者 中村元　ベンガル湾の聖地がもえた	Ｃ-0012(インド)
放送大学ビデオ教材　外国人留学生の現状	Ｚ-0013(日本)
インドの星　マザーテレサとその世界	Ｃ-0014(インド)
阿闍世王	Ｂ-0015(インド)
海外ドキュメント １ ガンジスの大祭・クンブメーラ	Ｒ-0016(インド)
インドの聖者祭り	Ｒ-0017(インド)
生まれながらの差別　インド　カースト制度	Ｃ-0018(インド)
輝け命の日々よ	Ｈ-0019(日本)
ウイラヴ裕さん　癌を明るく	Ｈ-0020(日本)
ダライ・ラマ　～亡命の30年～	Ｂ-0021(チベット)
舞台・いのちの限り　宇野重吉　旅公演２万キロ	Ｈ-0022(日本)
仏教文化の源流をたずねて―ガンダーラ―	Ｂ-0023(インド)
コスモス　セーガン博士の宇宙旅行　宇宙の地平線	Ｐ-0024(インド)
天台山国清寺	Ｂ-0025(中国)
THE LONG SEARCH WITH RONALD EYRE 1	Ｂ-0026(スリランカ)
THE LONG SEARCH WITH RONALD EYRE 2	Ｂ-0027(日本)
王舎城の悲劇――観無量寿経の意	Ｂ-0028(インド)
放送大学ビデオ教材 民族学への旅②　モンゴル・シベリア	Ｅ-0029(モンゴル、シベリア)
ＮＨＫ市民大学　祈りの造形―極楽の光景―	Ａ-0030(日本)
ＮＨＫ市民大学　祈りの造形―浄土へのあこがれ―	Ａ-0031(日本)

教育テレビスペシャル　アジアの遺跡 　第１回　聖都興亡～スリランカ～	B-0032(スリランカ)
ガンダーラ　～仏像誕生のロマン～	A-0033(インド)
仏像のはるかな旅	A-0034(インド)
海のシルクロード　第７集　仏陀と宝石	B-0035(スリランカ)

上記の一覧表だけでは教材活用のためには不十分である。そこで本共同研究の研究員が自分で観賞したり、教室で使用したりして、その活用方法を検討した。そして、収集教材のすべてにわたって、収録時間、内容、活用方法などについて詳しく記載したカードを作成した。紙幅の関係で、ここにその全カードを掲載することはできないので、三例だけ記すことにする。

視聴覚教材カード　〔例１〕

番号　B-0002(インド)
種類　ビデオ
題名　お釈迦さまの足跡 1
収録年月日
制作（出版所・放送局等）　すねいる
関連人物（作編者・監督等）　撮影・文・構成：久保尚志
ナレーション：石田千尋、劇団すねいる座
音楽・効果音：伊藤真由美
収録時間（時：分）　2：35
内容　仏教遺跡・釈尊の伝導地の数々をスライドあるいは考古学的遺品によって見せる。

タイトルに「お釈迦さまの足跡」とあり、ナレーションも仏伝によるところが多いが、特定の経典にもとづいているのではなく、釈尊が伝導説法した足跡を総合して、映像の構成に合わせ解説する形をとる。全体が６部で構成されており、各部のタイトルと紹介される主な土地、時間は以下の如くである。

１.「誕生　ルンビニー」
　［マヤ堂、アショーカピラー、カピラ城跡（ティラウラコット／ニガリ・サガル／ピプラワー］　約28分
２.「成道　ブダガヤー」
　［尼連禅河、苦行林、前正覚山、象頭山、大塔周辺］　約24分
３.「初転法輪　サルナート」

［ベナレス、ガンジス河、サルナート、サルナート考古学博物館］　約23分

4．「説法１　ラージギル、バイシャーリー」

［ラージギル：王舎城、竹林精舎、第一結集窟、霊鷲山、ギバ大臣邸宅跡、牢獄跡、阿闍世王ストゥーパ跡、

バイシャーリー：アショーカピラー、ストゥーパ跡、僧院跡、宮殿跡、博物館、ストゥーパ跡（舎利発見地）］　約27分

5．「説法２　サヘート・マヘート、サンカッシャー、コーサンビー」

［サヘート・マヘート：シュラーヴァスティー、祇樹給孤独園、祇園精舎跡、ガンダクティ精舎跡

サンカッシャー：アショーカピラー頭部、祀堂

コーサンビー：ヤムナー河、コーサンビー遺跡、アショーカピラー、東門跡］　約29分

6．「涅槃　クシナガラ」

［王舎城、霊鷲山、ナーランダ大学跡、パトナ、バイシャーリー、ヒラニャヴァティー河、涅槃堂］　約27分

活用方法　考古学的調査結果の一端が紹介されるだけでなく、若干の箇所で現在の仏教学において問題になっている点（たとえば、仏滅年代等）も指摘されている。

ストーリーに従って、彫刻、レリーフ等の出土品がジャータカ等の語るところとあわせて多数紹介される。これら考古学美術品を所蔵する博物館等も明らかにされるため、その所在を知るうえでも有益である。また各地の考古学博物館の特徴にも触れている。

各部は25分前後で構成されており、授業における時間配分も容易である。「釈尊伝」「インド仏教史」「インド仏教文化」等の授業に有益。

視聴覚教材カード　〔例２〕

番号　B-0010（インド）

種類　ビデオ

題名　インドこころの旅　第１巻　哲学者 中村元　ブッダ最後の旅路をゆく

収録年月日

制作（出版社・放送局等）　ＮＨＫ

関連人物（作編者・監督等）　哲学者：中村元　語り：飯窪長彦

撮影：新沼隆朗

構成：田辺祥二、河邑厚徳

写真：大村次郷

収録時間（時：分）　45分

内容　『マハーパリニッバーナスッタンタ（ブッダ最後の旅）』をもとにして、ラ

ージギルの霊鷲山から始まり、ナーランダ、パトナ、ヴァイシャーリーを経てブッダが入滅するまでを、中村元氏の解説でたどる。

ジャイナ教徒の小鳥の病院（デリー）
　不殺生の精神、インドの心
ラージギル　　霊鷲山：ブッダ最後の旅路の出発点
↓
ナーランダ　　ナーランダ仏教大学遺跡
↓
パトナ
↓　（聖なるガンジス河の説明）
ヴァイシャーリー　　アショカ王柱
↓
クシナガラ　　釈迦涅槃像

※ヴァイシャーリーからクシナガラ間の旅路が省略されているのが残念である。

活用方法　『ブッダ最後の旅―大パリニッバーナ経―』中村元訳、岩波文庫、を学生に読ませ、その講義の後でこのビデオを見ると効果的である。

大学の教材としては、初級用である。

保存状態

報告書作成年月日　1992. 8. 19

視聴覚教材カード　〔例3〕

番号　B-0026

種類　ビデオ

題名　The Long Search with Ronald Eyre 1

収録年月日

制作（出版社・放送局等）

関連人物（作編者・監督等）

Ronald Eyre,　Editorial Consultant : Professor Ninian Smart.
Advisers : The Venerable Walpola Rahula, Dr. Nandasena Ratnapala.
Produced by : Peter Montagnon (BBC Color)

収録時間（時：分）　50分

内容　イギリス人の Ronald Eyre がスリランカの仏教を訪ね、仏教とは何であるかを明らかにしようとしたフイルム。全体は仏教僧アーナンダ・マイトリヤに対するインタビューによって構成されている。全編英語。

スリランカ
仏教の小学校の教育風景

「ブッダとは」
　歴史をたどる
　ブダガヤ
　サルナート
アーナンダ・マイトリヤの案内で、彼のホームタウンの寺を訪ね、入門式の様子を詳しく紹介
五戒
十戒
仏教の教義：無常、布施、慈悲
安居あけの祭り
アメリカ人僧侶へのインタビュー
仏教徒でありながら霊（スピリット）の信仰をしている様子
森林僧の生活

以上によって、仏教とはニルヴァーナ（涅槃）にいたる教えであることを明らかにしている。

スリランカの仏教について、よくまとめられている。

活用方法　　仏教学。民族学。特に、南アジアの地域研究の入門者向き。説明が英語であるので解説が必要である。

保存状態　　不鮮明

報告書作成年月日　　1992. 9. 29

［2］　視聴覚教材の活用方法

［a］

収集した上記の視聴覚教材ビデオの一部をわれわれ研究員が実際に授業で使用して教育効果のあがる活用方法を考えてみた。ここに、筆者が「人間学II」（半期）の授業での場合を、受講生に対するアンケート調査を分析しながら、適切な活用方法の一例を検討してみたい。

「人間学II　仏跡と求法者の旅」（半期）は、インドの仏跡に詣でた中国、チベットの求法者の記録をもとにして、その当時の仏教、仏跡の歴史、美術などを学習することを目的にする講義である。講義内容は、法顕、玄奘、義浄、ダルマスワーミンがインドの仏跡に詣で、見聞したことの記録をもとにしながら、求法者たちのブッダ、仏教に対する思い、ならびに求法者たちが抱いていた求

法の使命を明らかにすることにある。さらに、近代において仏教復興運動に生涯をささげたダルマパーラについても多少とりあげた。

視聴覚教材については、半期の中間と後半の二回に分けてビデオ「お釈迦さまの足跡１」を使用した。それは、上記の「視聴覚教材カード」で示されているように、ブッダの誕生、成道、初転法輪、説法、涅槃の順に仏跡をたどっている。考古学的資料についてもかなり多く解説がなされ、その内容も適切である。半期授業の最後にビデオ活用のアンケートに無記名で協力してもらった。アンケートの内容は下記の如くである。なお、【　】の中の数字は回答数をあらわす。

アンケート　（無記名）

1)　授業におけるビデオ使用について
　a）　ビデオを使用する必要はない（講義だけで充分）。　【２】
　b）　ビデオを使用する方がよい。　【40】
2)　授業でビデオを二回見たが、その回数について
　a）　二回くらいがよい。　【９】
　b）　もっと多く仏跡の一つ一つについてビデオを見る方がよい。　【32】
3)　仏跡のビデオをまとめて見る方がよいか。
　a）　いくつかの仏跡をまとめる方がよい。　【15】
　b）　一つの仏跡のたびに見る方がよい。　【26】
4)　講義のテーマの前にビデオを見る方がよいか、後で見る方がよいか。
　a）　講義の前にビデオを見る方が講義がわかりやすい。　【６】
　b）　講義の後で見る方がよい。　【35】
5)　講義とビデオを混ぜながら進める方がよいか。
　a）　混ぜる方（同時進行）がよい。　【31】
　b）　混ぜない方がよい。　【10】
6)　授業の内容の理解という点から、どのようにビデオを使用したらよいと思いますか。
7)　その他、授業のビデオ使用などについて自由に意見を書きなさい。

［b］

アンケートの回答者総数は42名である。まず、1)授業におけるビデオ使用について、40名の学生が、b）ビデオを使用する方がよい、に回答している。95.2パーセントの学生がビデオ使用を希望していることになる。a）ビデオを使用する必要はない（講義だけで充分）、を答えた学生は２名いる。そのうちの１名

は、2)以下にも回答している。そして、6)では、内容理解という点ではあまりビデオを使う必要はないと思うが、ビデオによって興味が増したりして、自分で勉強するようになるかもしれない、と書いている。したがって、ビデオ使用はまったく必要ない、という意見ではないようである。他の１名は、2)以下のアンケートにはまったく回答していない。

2)のビデオ使用回数については、ａ)二回くらいがよい、が21.9パーセントに対して、ｂ)もっと多く仏跡の一つ一つについてビデオを見る方がよい、と答えた学生は78.1パーセントである。二回という根拠については明らかではないが、おそらく半期の授業では二回くらいが適当ということであろう。ｂ)回答者のなかには、7)で「あと数回ビデオを見せてもらった方がよかったと思います。話を聞いての想像と、実際の映像との違いは案外大きかったです。」、とか「ビデオは具体的な理解が得られるので、どんどん使ってください。」などの意見があった。

3)については、ａ)いくつかの仏跡をまとめる方がよい、が36.5パーセントに対して、ｂ)一つの仏跡のたびに見る方がよい、が63.4パーセントである。ａ)回答者のなかに、6)で「講義の内容が一段落つくごとに、仏跡などのビデオを見たらよいと思います。」と意見が書かれていた。それに対して、多くの学生は、まとめるのではなく、一つのテーマのたびに見る方が印象に残ると思っている。

4)について、ａ)講義の前にビデオを見る方が講義がわかりやすい、の回答が14.6パーセントに対して、ｂ)講義の後で見る方がよい、が圧倒的に多く、85.3パーセントである。講義の後で見る方が有効的であるようである。しかし、講義の前に見るのにも、それなりの有効性がある。ａ)回答者のなかで、6)で、「まず一つの仏跡についてのビデオを見て、その後すぐに先生の説明を加えれば効果的だと思います。」、とか「ビデオを前に見てから授業の説明にはいり、『ビデオで見たように……』といった感じにすすめていただくとよい。」、「その地の様子を想像しながら講義を聞いて理解しようとするよりは、あらかじめ映像を通じて確かな絵を頭に置いて聞いた方が実感がわくし、雰囲気がつかめて理解が深まると思う。」などと書いている学生がある。したがって、講義内容によっては、講義の前にビデオを見せることが必要な場合もある、と理解すべきである。

5)講義とビデオを混ぜながら進める方がよいか、については、ａ)混ぜる方(同

時進行)がよい、が75.6パーセント、b)混ぜない方がよい、が24.4パーセントである。a)の回答者の一人が、6)で「まず講義によって言葉の意味、理由などの知識を理解する。その後、『どのようなものか？』という疑問を解消するために、先生の講義をビデオという映像と音声によって、再び、強く印象づけることによって、理解を深めていくようにするとよいと思う。つまり90分内に、講義＋ビデオという形式を常にとっていくのが一番よいと感じる」と書いている。それに対して、b)回答者のなかに、6)で「ある程度まとめて講義をした後でビデオを見るのがよいと思う。その時にただ見るだけでなく、少し説明を加えて下さると理解しやすいと思う。」という意見もある。

［c］

6)授業の内容の理解という点から、どのようにビデオを使用したらよいと思いますか、という調査に対して、ほとんどの学生がビデオ使用の有効性を認め、さまざまな貴重な意見を書いている。そのうちのいくつかを紹介したい。

「ただ単に文章の説明をされただけでは理解しにくいと思う。特にその当時、その都市がどんな様子であったとか、そういう事は視覚で感じた方がより理解しやすいと思う。また歴史に触れる、異文化（異世界）に触れるという点でも、ビデオという副教材を使うのはよいと思う。」

「ビデオは重点的に見せて、なるべく時間は短い方が集中できると思います。（15分～30分ぐらい、授業の終わりのあたりとかに）」

「文献の解説などの場合は単語の詳細な意味などを口述と板書で説明していただければ理解が深まるように思います。建築物の形状やその土地の雰囲気などを紹介していただく時にはビデオで視覚的に伝えていただければ、より分かりやすいのではないかと思います。」

「各テーマが終わるごとにビデオを見た方がそのテーマ内容がビジュアルに鮮明になるのでよいと思う。できれば、スライドのような静止画像より、テレビの特集番組のようなテンポのあるものがいい。」

「講義を最初におおまかに短めにして、それから後に関係する所のビデオを流せばいいと思います。そして、テキストはビデオ観賞後、各自、家で読んできてもらって理解してもらう。」

「僕は、釈尊の生きたインドに一度も行ったことはありません。授業で法顕伝を通してインドの様子が分かるのですが、今ひとつもの足りないのです。今

回二回ビデオを見ましたが、授業で習ったことが映像で生き生きと映しだされて、とても印象深く感じました。ただ、半期の授業のため時間が充分にないので、うまく授業のペースを考えて、ビデオをもっと多く見せてほしいと思います。」

アンケートの、7)その他、授業のビデオ使用などについて自由に意見を書きなさい、の場合も、ビデオ使用を求める意見がほとんどであるが、そのなかから貴重なものを若干記しておきたい。

「一回一回の授業に少しビデオをはさむことで頭に残りやすく、わかりやすい。一時間中をビデオ使用にすると、眠くなってしまうので効果が半減する。またビデオを見ることにより、より興味が湧いてきて授業への関心度も高まると思う。そういう点ではもっとビデオを使用してほしいと思う。」

「ビデオ、スライド、その他視聴覚教材の使用はたいへんよいと思う。なぜなら私たちは文字ではなくて、どちらかといえば、テレビ、映像の世代の子であるから、ビジュアルに訴えられるとたいへん頭に残るし、楽しい。」

「先生がビデオを見ている時に、少し補足説明をしてくださるのもいいかもしれないと思う。」

「ビデオだけでなく、その地方が今現在どのようになっているかなど写真でもいいので見せてほしい。写真のネガもビデオのように映しだすことができるのでやってほしい。」

「講義＋ビデオという形式によって授業を進めて行き、それが終わった後、先生の方からビデオに対する質問や感想を聞いたり、授業ごとに簡単にその日学んだ事を紙に書いてもらうのもどうですか。そうすると、緊張した、やりがいのある授業になるのではと思います。」

「資料映像のビデオだけでなく、『世界不思議発見』のような、また『ＮＨＫ歴史ドキュメント』のようなテレビの映像ビデオも沢山見たいと個人的に思います。」

［ｄ］

以上、「人間学Ⅱ　仏跡と求法者の旅」の授業で行ったアンケート調査の分析を試みたが、全体的に言えることは、どの学生も授業でのビデオ使用を強く希望していることである。講義だけを聞くよりは、講義に関係するビデオを見ることによって、講義内容が頭に残り、集中力も高まるようである。それに、現

在の学生は、テレビ、映像の世代の子であるから、テキストによる文字だけでは充分に講義内容に興味を示さないようである。ビジュアルに訴えられなければ頭に残らないのである。

授業でのビデオ活用については、さまざまな方法が考えられる。まとめて長時間ビデオだけを見るのは効果的ではないことがわかる。講義とビデオを混ぜながら、同時進行する方がよいようである。ビデオを見る場合も、ただビデオを流すだけではなく、ところどころに講義との関連を説明することも必要である。講義の前にビデオを見る方がよいか、後で見る方がよいか、については、後の方がよいようであるが、講義内容によっては前に見ることが効果的な場合もある。さらに、ビデオを使用した場合、見たビデオに対する感想を学生に書かせ、講義理解に役立てるよう試みることも必要である。

「人間学II　仏跡と求法者の旅」をもとにしながらビデオ教材の必要性を論じてきたが、これは、大なり小なり、仏教学科のどの授業においても考えなければならない課題である。仏教の歴史や文化に関する授業には、今やビデオ教材の活用は欠かせないことは言うまでもない。仏教の教義や思想をテーマにする授業でも、関係するビデオ教材を活用して、教育効果をあげることは考えられる。現在の学生は、講義を聞くだけでは充分な理解を得ることができないのである。したがって、今後ますますビデオ教材の必要性が高まっていくに違いない。

そこで、ビデオ教材の活用が充分になされるためには、まず教材の収集がなされていなければならない。つまり、本共同研究で行ったようなビデオ教材の収集とその整理すなわち視聴覚教材カードの作成が常に組織的になされていなければ、充分な活用が期待できない。そこで、ビデオ教材を組織的に収集し、整理する方法を仏教学科の教員スタッフのなかで考え、できるだけ早いその組織の実現を希望するものである。

II. ミシガン大学の仏教学教育法

アメリカの諸大学において仏教学がどのような方法で教授されているかを調査するために、ウイスコンシン大学を初め、ミシガン大学、ハーバード大学、エール大学、バークレイ大学、ハワイ大学など、仏教の講義を持つ幾つかの大学から便覧等を取り寄せて検討してみた。しかし便覧ではとうていその教育法を知るだけの情報は得られなかった。ところが幸いにも、本学の仏教学科専任講師の兵藤一夫氏が1992年の８月から３ヶ月間ミシガン大学に留学されることになったので、本研究班の調査にご協力いただくことをお願いした。兵藤氏は短期間の多忙な研究期間であったにも拘らず、当方の依頼の意図をよく了解して下さり、資料の収集などに貴重な時間をさいていただいたことをこの場を借りてお礼申し上げる。この報告書は兵藤講師に話していただいたものを、本研究班の担当者（小谷）が整理したものである。（掲載が遅れたため、少し古い資料となったことをお断りしておきたい。）

ミシガン大学では、学部には「仏教学」を専攻するコースは設けられていないが、College of Literature, Science, & The Arts に含まれる Far Eastern Languages and Literatures のコースの中で仏教は教えられている。当時はゴメッ（Dr. Luis O. Gómez）、ロペッ（Dr. Donald S. Lopez）、フオーク（T. Griffith Foulk）の三教授が主としてその方面を担当していた。兵藤氏から聞いた三教授の授業風景は、アメリカの諸大学で行なわれている仏教学の授業に多かれ少なかれ共通するもののように思われる。そこで以下に三人の教授たちの授業の仕方を報告することとする。

先ずロペッ教授の「仏教入門」Introduction of Buddhism の講義は、学部の学生を対象として、90分授業で一週二度行なわれる。そしてそれぞれの講義に関して、教育スタッフとして指示された修士課程の学生たち（アルバイト料が支給される）がチューターとなって、二つに分けられたクラスを分担（学生は一クラス20人ほど）して討議形式の補習を行い、それによって初歩的な受講者の理解を深めることを助けるという、かなりきめ細かな仕方で授業は進められる。講義の内容は、縁起や四聖諦や八聖道など仏教の基礎的な用語を解説することを中心とするものである。この講義ではかなり頻繁に試験が課せられるが、この試験を採点し注意事項を記して学生に返却するのはチューターの役割であ

る。このように学部の学生たちの勉強に関わることによって、大学院の学生たちにも教育者としての訓練を積む機会が持てるように考慮されている。

この他にロペツ教授は大学院生を対象とした「古典チベット語文献」Classical Tibetan の授業を担当している。今年は龍樹の「法界讃」*Dharmadhātustotra* をテクストにして演習がなされている。テクストは教授のその時々の学問的関心によって選択されているようである。この科目も90分授業で一週二度行なわれる。出席しているのは二、三名の大学院生である。教授がテクストを読み試訳を述べ解釈を施した後に、それに関して学生が討議を加えるという形式で授業が行なわれる。従って聴講生は相当高度なチベット語の学力と仏教の理解を要求される。ロペツ教授は一週間に以上の四コマの授業を担当している。週四コマというのがミシガン大学の平均的な授業時間数である。このように一週に二回行なわれる授業は一コマ90分で行なわれ、一週に三回の授業は一コマ60分で行なわれるというのが、ミシガン大学のみならずアメリカの大学の時間割の一般的な組み方のように思われる。

次にフォーク教授の授業について述べよう。この授業は「日本の宗教」Japanese Buddhism という科目名が付けられており、大学院生を対象として行なわれる。この授業も一コマ90分で週二回行なわれる。その年の受講生は仏教学以外に社会学や宗教学を専攻する学生を含めて三、四人とのことである。現在使用されているテクストは分からないが、おそらく教授が敦煌文献や日本の禅録を専門としていることから考えて、禅経か禅録をテクストとして演習形式で授業が行なわれているものと思われる。

最後にゴメツ教授の「仏教の諸問題」Problems in Buddhism の授業について報告しよう。幸い兵藤氏にこの授業のシラバス（本報告書末尾に添付）を頂いたので、それを参考にしつつ教授の授業法を見てゆくこととする。これは学部と大学院の共通の授業で、60分授業で週三回行なわれる。この授業は、英訳仏典とその研究書を資料として講義を行い、そしてその内容を討論するという形式で行なわれる。（兵藤一夫「ゴメツ教授による大学院特別セミナーについて」（『仏教学セミナー』No.56、1992）にもその一端が紹介されている。）

このシラバスは1992年度前期分（course in fall）のものである。この科目の今学期の副題は「天と地獄に関する仏教の見解」Buddhist visions of Heaven and Hell と名付けられている。仏教における死後の問題、特に死後の場所の問

題が考察の対象となる。従って死後に関する仏教神話学や宇宙構造論を取り扱うことになるので、受講生はその方面の多数の論文や著書をあらかじめ読んでおくことが要求される。シラバスにはそれらの文献名と共に読むべき頁数が指示されている。

学部学生の場合には24種、院生の場合にはその上に更に26種が読まなければならない文献として掲げられている。これらの文献は、学生の便宜のために授業中に読む箇所だけを抜粋して、Course Pack として販売されている。シラバスによれば学部の学生は前期中に1000頁にのぼる Course Pack を三冊、院生はその上、更に三冊読まなければならない。このように学生はかなりな分量の読書をこなさなければならない。

学部受講生の評価は、これらの文献を読んで短いレポートを提出し（30%）、三回の小テストを受け（30%）、期末試験を受け（30%）、そして普段の授業に如何に参加したか（10%）によって決定される。

大学院生の場合は、指定された文献を全て読むことは勿論、その上、必要な時には学部学生の相談相手になることも要求される。また大学院生は、指定された日に指示された文献に関して口頭による要約をしなければならない。それ以外の学生は全員それまでに、その文献に関して300語以内の要約に100語以内の批評を添えて提出しなければならない。このようにして院生の評価は小論文（20%）、小テスト（５%）、定期試験（20%）、授業への参加度（５%）、口頭での要約（20%）、文章での要約（30%）によって決定される。

ゴメツ教授のもう一つの授業は「サンスクリット文献講読」Sanskrit Reading Seminar である。今年は *Bhāvanākrama* をテクストとして用いている。サンスクリット文献の講読としては近年は大乗経典を続けて読んできたが、今年は久しぶりに論書を読むということである。この授業は日本のサンスクリット語テクストの講読の授業とそれほど違はないように思われる。

以上がミシガン大学の仏教学の授業風景である。このような授業法は、筆者が1983年にアメリカの幾つかの大学の仏教学を参観した時にも「アメリカの仏教学の特徴」として印象深く感じたものであった。それが大谷大学のような原典を中心とするものでないことは明らかである。そこには現代の哲学や社会学や心理学、或いは人類学や民俗学や神話学などの分野で問題とされる方法論が、仏教学の研究法や教育法の上にも色濃く反映している様が窺われるのである。

Course Description

Buddhist Studies 480 / Asian Studies 480 / Phil. 457 / Religion 480
Problems in Buddhism

Buddhist Visions of Heaven and Hell

3 credits
Prereq. Buddhist Studies 230 or 320, or equivalent
(Instructor : Gómez)

The designation " Problems in Buddhism " (also known as " Topics in Buddhism ") is meant as a general label, or umbrella title, for a course in which we cover selected topics in the history of Buddhist ideas. The class combines lectures and discussions on primary sources (" Buddhist Texts ") in English translation, and secondary sources (including readings on theory and method as well as readings on the history and exegesis of Buddhist texts). Buddhist doctrines are approached from several points of view using the conceptualizations of classical Buddhist systems, as well as modern tools from history of religions, literary criticism, and the social sciences.

The subtitle, and focus for this course in fall 1992 will be what is called, for lack of a better expression, " the geography of death " in Buddhist belief. In other words, in this course we will explore some Buddhist ideas about the afterlife, especially ideas about the " locus " of the afterlife to what sorts of worlds, world-systems, or world-levels, are sentient beings destined once they die in this, our time and place=

The topics covered will be Buddhist mythologies and cosmographies of the afterlife, with a special emphasis on the descriptions of the hells and heavens, and " Pure and Impure Worlds, " and the imagery used to describe imperfect worlds and perfect paradises. The theologies (or " buddhologies ") that justify and explain such beliefs will also be discussed, but only as a secondary issue.

Readings include English translations of texts originating in India, China, and Japan.

The course is open to upper-class undergraduates and to graduate students. Course work and readings presuppose previous exposure to the academic study of religion and the study of Asia.

Reading assignments are extensive.

Undergraduates will be responsible for all readings labeled " general " in the list of required readings. They will also be required to write a short paper (30%), take three short, in-class, quizzes (10% each), and take a final examination (30%). Class participation counts as 10% of the grade.

Graduate students are expected to read all readings listed as required, and

to meet all the undergraduate requirements. They are also responsible for periodic oral summaries and critical appraisals of selected readings (see sign-up sheet). On the day that the designated student presents the oral summary, and before the summary is presented, all other graduate students are expected to submit a written summary of the reading on the sign-up sheet (not mor than 300 words) with a critical evaluation of the reading (not more than 100 words).

Graduate student grades will be determined as follows:

1) short paper (20%).
2) quizzes (5% each).
3) final examination (20%).
4) Class participation (5%).
5) Oral summaries and critical appraisals (20%)
6) Written summaries (30%)

Course Outline

I. Preliminaries
  A. Why study this topic.
  B. Why ask why.
  C. The question of "method" and the question of the question.

II. Introduction to the Study of Mythology and Cosmology
  A. Basic concepts of method and terminology
    1. History of religions
    2. Myth and mythology
    3. Mythical time and space (issue 1)
      a) Geographies of death
        (example from Shamanic traditions)
      b) Eschatology and cosmogony
        (example from Christian theology)
      c) Mythical geography and cosmology
        (example from Australian ritual)
  B. Mythology and theology (issue 2)
    Brief history of the study of mythology and the methods used in its study

III. Review of methodology (issue 3)
  A. Constructing truth and cosmos.
    1. Knowledge, Truth, and Power.
    2. Thinking through cultures---diverging rationalities.
    3. Maps and cosmic realms.
    4. Text and cosmos.
  B. Theories of myth.

IV. Death, immortality, and afterlife (issues 1 and 2)
  A. Terminology pertaining to the geography of death and the afterlife

1. Geography of death, geographies of death
2. Afterlife, afterworld, hereafter, beyond
3. Immortality, self, soul, and spirit
4. Soul, spirit, psyche
5. Paradise and Heaven
6. Underworld, Hades, hells, Hell, nether world.
7. Hells and Purgatories
8. Limbo

V. General introduction to geographies of death Concrete imagery and theology (issue 2)

A. General, and preliterate societies (Eliade, anthologized texts in…)

B. Roots of Western Conceptions

1. In the Ancient Near East
   a) Babylonian conceptions
   b) Early Jewish conceptions
2. In the Classical World: dystopias, utopias and eutopias
   a) Golden Age and Elysium
   b) Hades and the survival of death
   c) The Isles of the Blessed
3. Iranian eschatological beliefs
   a) Resurrection and restoration of all things
   b) Beings of light and beings of darkness
4. Christian conceptions
   a) The Book of Revelation
   b) Medieval conceptions
   c) Dante
   d) The demythologization of the afterlife
   e) Resurrection vs. immortality

C. Cosmology and the geography of death

D. Utopias and the quest for immortality

E. Theories of the afterlife

VI. Non-Buddhist conceptions of the afterlife in India (Sullivan, pp. 189-197)

A. Early Indian

1. Ṛg- and Atharva- Veda
2. Brāhmaṇas and Upaniṣads
3. Jainas

B. Hinduistic conceptions of the geography of death

1. Epics and Purāṇas
2. Philosophical systems and Hindu theologies

VII. Buddhism in India

A. The Pāli Suttas

1. Sources for Bubbhist geographies of death

2. Buddhist hells
3. Buddhist paradises

B. Abhidharma and Lokaprajñapti
1. Cosmographies and geographies of death
2. Mythologies of meditation, mythologies of salvation, and cosmographies

C. Mahayana geographies of death and Mahayana paradises
1. Models of paradise
a) Royal cities
b) The Palaces of the Devas
c) Other models and extra-Indians sources

VIII. Visions, visionaries and theologians.

IX. Mahayana paradises
A. The bodhisattvas
1. Akaniṣṭha
2. Tuṣita : The Paradise of Maitreya
3. Avalokiteśvara's abode in Potalaka
4. The Paradise of Mañjuśrī

B. The buddhas
1. The Paradise of Bhaiṣajyaguru
2. The Paradise of Akṣobhya

C. The Paradise of Amitābha

X. Buddhist theologies and East Asian conceptions of the " Pure Land "
A. Sino-Japanese conceptions of the afterlife
1. Pre-Buddhistic notions
2. Buddhist hells and lands of recompense

B. The Ōjōyōshū
B. Critique and demythologization
C. The tradition of the Vimalakīrti
D. Paradise as an Ideal World

XI. Afterlife and " the fantastic "

XII. Conclusions
A. The place
B. The ideal
C. Psychological and sociological interpretations of paradise as demythologized idealizations
D. Theologies of paradise and theologies of liberation

Required Readings (full references in the attached bibliography)

Text Books: (at the Shaman Drum)

Cowell, et al. (1894). *Buddhist Mahayana texts.*

Kloetzli. (1983). *Buddhist cosmology.*

Sullivan. (1989). *Death, afterlife and the soul.*

Course Pack

Required Readings in the Course Packs:

Full entries are found in the bibliography below.

Items in this list appear in the order in which they are bound in the Course Packs.

Items labeled

" General " are found in Course Pack #I (parts A, B, & C). Items babeled " Specialized " are found in Course Pack #II (parts A, B, & C).

Specialized (grad, only): Foucault, Power and knowledge.

General (undergrad. & grad.): Bruner, 1986, Afterword.

Specialized (grad. only): Shweder, *Thinking through cultures*, pp. 1-72.

General (undergrad. & grad.): Hollis, The limits of irrationality; & Hollis, Reason and ritual.

Specialized (grad. only): Jarvie & Agassi, The problem of the rationality of magic; & Lukes, Some problems about rationality.

General (undergrad. & grad.): Smith, J. Z., 1978, Chapter Thirteen: Map is not territory.

Specialized (grad. only): LaCapra, Rethinking intellectual history and reading texts; & Sullivan, " Seeking an end to the primary text " or " Putting an end to the text as primary. "

General (undergrad. & grad.): Cohen, Theories of myth.

Specialized (grad. only): Segal, In defense of mythology; & Douglas, W. W., The meanings of " myth " in modern criticism.

General (undergrad. & grad.): Hinko, Lauri, The Problem of defining myth; Pettazzoni, R., The truth of myth. 41-52, 98-109.

Specialized (grad. only): Bascom, W., Four functions of folklore; & Bascom, W., The forms of folklore. 5-29

General (undergra. & grad.): O'Flaherty, Other peoples' lies, Chapt. 2 of *Other peoples' myths.*

Specialized (grad. only): Levi-Strauss, The Story of Asdiwal; Douglas, M., The meaning of myth: & Ricoeur, P., Myth as the bearer of possible worlds.

General (undergrad. & grad.): Eliade, Mythologies of death, an introduction.

Specialized (grad. only): Firth, The fate of the soul.

General (undergrad. & grad.): Eliade, *Death, afterlife, and eschatology.*

Specialized (grad. only): State of the dead (selections from the *Encyclopaedia of*

Religion and Ethics, vol. 11, pp. 817-854)

General (undergrad. & grad.) : Selections from Peters, *Judaism, Christianity, and Islam,* pp. 329-396.

Specialized (grad. only) :

General (undergrad. & grad.) : Gombrich, Ancient Indian cosmologies.

Specialized (grad. only) : Cosmogony and cosmology (Indian). (Selections from the *Encyclopaedia of Religion and Ethics, vol. 4,* pp. 155-161). Cosmogony and cosmology (Buddhist). (Selections from the *Encyclopaedia of Religion and Ethics, vol. 4*, pp. 129-138). Ages of the world. (Selections from the *Encyclopaedia of Religion and Ethics, vol. 1,* pp. 183-210)

General (undergrad. & grad.) : Eliade, Time and eternity in Indian thought.

Specialized (grad. only) :

General (undergrad. & grad.) : Eliade, Paradise and utopia.

Specialized (grad. only) : Frye, Varieties of literary utopias. Blest, Abode of the. (Selections from the *Encyclopaedia of Religion and Ethics, vol. 2,* pp. 680-710).

General (undergrad. & grad.) : von Glasenapp, *Immortality and salvation in Indian religions.*

Specialized (grad. only) : Obeyesekere, The rebirth eschatology ; McDermott, Karma and rebirth in early Buddhism ; Stablein, Medical soteriology ; and Jaini, Karma and the problem of rebirth in Jainism.

General (undergrad. & grad.) : Selections from *Ṛg* and *Atharva Vedas*. Selections from the *Upaniṣads.*

Specialized (grad. only) : Selections from the *Śatapatha Brāhmaṇa* and *Kāṭha Upaniṣad.*

General (undergrad. & grad.) : Selections from the *Mahābhārata,* & from *Mārkaṇḍeya Purāṇa.*

Specialized (grad. only) : Selections from Viṣṇu Purāṇa.

General (undergrad. & grad.) : Naryan, *Storytellers, saints, and scoundrels,* pp. 189-207.

Specialized (grad. only) :

General (undergrad. & grad.) : Selections from the Pali Canon---Cakkavattisīhanādasuttanta, Agaññasuttanta,

Specialized (grad. only) : Selections from the Pali Canon---the two Devadūtasuttas.

General (undergrad. & grad.) : Selections from the Pali Canon---Balapaṇḍitasutta, Cūla- and Mahā-Kammavibhaṅga suttas

Specialized (grad. only) : Selections from the Pali Canon---Rājasutta, Uposathaṅgasutta, Saṅkhāruppattisutta

General (undergrad. & grad.) : Selections from the Pali Canon---*Petavatthu and Vimānavatthu* selections.

General (undergrad. & grad.) : Barua, Buddhakhetta ; *Anāgatavaṃsa* ; & Conze, The prophecy concerning Maitreya,

Specialized (grad. only) :

General (undergrad. & grad.) : Selections from the *Mahāvastu*.

Specialized (grad. only) : The Story of Sadāprarudita from the *Aṣṭasāhasrikā* (Conze, *Perfection of Wisdom in 8000 lines,* pp. 277-298) ; The Vision of Prabhūtaratna from the Lotus Sutra (Kern, pp. 227-254) ; Beyer, Notes on the vision quest.

General (undergrad. & grad.) : Selections from the Lotus Sutra (Kern, pp. 376-392, 406-418)

Specialized (grad. only) : Fujita, Pure Land Buddhism and the Lotus Sutra.

General (undergrad. & grad.) : Selections from the *Mahāratnakūta* (Chang, pp. 315-338)

Specialized (grad. only) : Selections from the *Mahārantnakūṭa* (Chang, pp. 164-187)

General (undergrad. & grad.) : Selections from the *Vimalakīrti*, chapters 10 & 11.

Specialized (grad. only) : Selections from the *Vimalakīriti*, chapters 1 & 9, and Appendix ; Schopen, Sukhāvantī as a generalized religious goal ; & Schopen, The inscriptions on the Kūṣan Image.

Specialized (grad. only) : Pas, The Kuan-wu-liang-shou ching ; & Fujita, The textual origins.

General (undergrad. & grad.) : Chappell, Chinese Buddhist interpretations of the Pure Lands ; & Tanaka, *The Dawn*, pp. 103-106, 174-189 ; Kiyota, Buddhist devotional meditation.

General (undergrad. & grad.) : Reischauer, Genshin's Ojo Yoshu.

Reserve List : (to be provided once Library confirms availability)

シラバスには、これに続いて、必要文献についての詳細な Bibliography が付けられているが、それらは紙幅の都合で割愛する。

Fall 1992

Sanskrit Reading Seminar

Topic : Vocabulary and idioms of Mahāyāna śāstras

Goal : to develop a basic knowledge of the lexical, syntactical, and rhetoric conventions of Mahāyāna śāstras.

Means of achieving goal :

(1) translate in class, and without the aid of notes, a Mahāyāna śāstra.
(2) practice annotating the vocabulary, idioms and allusions in the text.
(3) present, for discussion, some of the annotations.
(4) compile a basic glossary of terms. [glossary will be compiled on disk and shared by all participants]

Measurement and grading :

(1) quality of oral translations
(2) quality of presentations (annotations)

(3) quality of glossary entries
(4) bibliographic entries for annotations and glossary.
(5) short (10 page) paper on any aspect of path theory mentioned in our main texts.

Main Texts:

Text for class translation: The " Third " *Bhāvanākrama* of Kamalaśīla

We will use the Sanskrit text edited by Tucci (1977), and at the Tibetan translation as reproduced in the Gangtok Palace Monastery reprint (1977) of the Rdzong-sar blockprints.

In class, however, you will be allowed to read only from the original Sanskrit *manuscript* as reproduced in Obermiller, 1963 (posthumous), and from a clean, unannotated, copy of the Tibetan.

Main Sources for Glossary Entries:

(1) The *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu (Pradhan, 1975). Tibetan version in the Tanjur, and Chinese version in Taishō 1558, 1559 [阿毘達磨倶舎論]

(2) The *Arthaviniścaya-sūtra* and its commentary *Nibandhana* (Samtani, 1971). Tibetan version in the Tanjur, and Chinese version in Taishō 762, 763 [決定義經 or 法乗決定經]

(3) The *Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga, with the commentary attributed to Sthiramati (Tatia, 1976). Tibetan version in the Tanjur, and Chinese version in Taishō 1606 [大乗阿毘達磨雑集論] ——see also 1605 [大乗阿毘達磨集論].

Sources for annotations: On Reserve.

Preliminary Bibliography

Gangtok Palace Monastery. (1977). *The five Bhāvanākrama* [*sic*] *of Kamalaśīla and Vimalamitra : A collection of texts on the nature and practice of Buddhist contemplative realisation.* Reproduced from the Rdoṅ-sar blockprints belonging to the late Spom-mda' Mkhan Rin-po-che. Gangtok : Gonpo Tseten, Palace Monastery. Printed in Delhi : Lakshmi Printing Works.

Obermiller, E. E. (1935). A Sanskrit manuscript from Tidbet---Kamalaśīla's *Bhāvanā-krama. Journal of the Greater India Society. 2* (1), 1-11.

……. (1963). Kamalashila, Bhavanakrama (Traktat o sozyertsanyi), *Pamjatniki Literatury Naradov Vostoka, Teksty, Malaja Serija XVI.* Moscow : Akademia Nauk. Includes a Russian translation.

Olson, Robert F., & Masao Ichishima, trs. (1979). The Third Process of Meditative Actualization. *Annual of The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism. Taishō University, 1,* 17-53.

Pradhan, Prahlad. (Ed.). (1950). *Abhidharma samuccaya of Asaṅga.* Visva-Bharati Studies 12. Santiniketan : Visva-Bharati.

……. (Ed.). (1975). *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu.* 2nd ed., rev.

with introd. and indices by Aruna Haldar. Patna : K. P. Jayaswal Research Institute. Tibetan Sanskrit Works Series [Bhoṭadéśīya-Saṃskṛta-granthamālā], No. 8.

Rahula, Walpola. (Trans.). (1971). *Asanga. Le compendium de la super-doctrine (philosophie) (Abhidharmasamuccaya) d'Asanga.* Paris: Ecole française d'Extrême-Orient, 1980, ©1971.

Samtani, N. H. (ed.). (1971). *The Arthaviniścaya-sūtra & Its commentary (Nibandhana) (Written by Bhikṣu Vīryaśrīdatta of Śrī-Nālandāvihāra).* Patna : K. P. Jayaswal Research Institute. Tibetan Sanskrit Works Series [Bhoṭadeśīya-Saṃskṛta-granthamālā], No. 13.

Tatia, Nathmal. (Ed.). (1976). *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam.* Nathamala Tatya sampaditam. Pataliputram: Kasiprasada Jayasaval Anusilanasamstha, Sam. 2033 [1976]. Tibetan Sanskrit Works Series [Bhoṭadeśīya-Saṃskṛta-granthamālā], No. 17.

Tucci, Giuseppe. (Ed.). (1971). *Minor Buddhist Texts. Part III : Third Bhāvanākrama.* (Serie Orientale Roma, vol. XLIII). Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

III. 仏教学教育としてのインド仏跡研修

1　大谷大学インド仏跡研修の実現

従来、大谷大学では、教員が個人的に学生をインドに引率するという仏跡研修ツアーが組まれることが多かった。この大学インド仏跡研修の実現するまでに、筆者も都合５回ほど学生を引率して、仏跡踏査研修を行ってきた。これまで引率した教員それぞれが、異口同音にその成果の素晴らしさを報告し、また、学生たちもインドとの出会いによって、彼らの価値観を変えるほどの感動を訴えている。各教員個人レベルでの引率によっても、そういう学生たちのインド仏跡見学によって得られる成果を本学での仏教学教育に活用することの効果には計り知れないものがあった。

数年前から、引率した経験のある教員たちの間から、このような試みは、個人レベルで行うよりも、学科、或いは大学が一定の計画をもとに行っていけば、その教育効果もいっそう上がるであろうということが指摘されてきた。そのような中で、平成２年末、本学の建学の精神の啓蒙を目的として開講されている講義「総合」（現在は「人間学Ｉ」）の担当者である真宗学科・仏教学科の教員たちの間でコンセンサスが得られ、本来は大学が主催して行うべきであるが、実施は１年でも早く行うべきであるとの共通認識から、暫定的に、発議した教員たちの所属する第一研究室と短期仏教科研究室とが企画主体となって、平成３年度より実施することになった。

平成２年はじめ、第一研究室と短期仏教科研究室の合同会議において、研究室主任、インド留学ならびに仏跡踏査経験者を中心にした実施委員会が結成され、具体的な準備にとりかかることになった。実施委員のメンバーは次の通りである。

委員長　小川一乗教授（現仏教学科主任•仏教学）、委員　長崎法潤教授（当時仏教学科主任・インド学）、小野蓮明教授（当時真宗学科主任・真宗学）、神戸和麿教授（短期仏教科主任・真宗学）、吉元信行助教授（仏教学）、延塚知道助教授（真宗学）、宮下晴輝専任講師（仏教学）。（職名は当時、以下同じ）

この委員会において、研修旅行の実施計画および旅行会社の選定を行った。当初、参加学生200人を限度として、具体的な計画を検討した結果、まず、イン

ドという異文化を体験することと、本学学生にとっての眼目である仏跡踏査、およびインドの学生との親睦を深めるという三つの主要な目的を設定し、今回のコースを決定した。また、時期については、１月から２月にかけての乾期がもちろん適当であるが、時間的余裕のある期間と旅行費用の割引率の高いことを考慮して、雨期にかかるが８月下旬から９月上旬にかけての時期にすることになった。

旅行会社の選定については、大勢の学生を引率するということから、事故発生の場合などの対応や責任体制のしっかりしている旅行会社で、インド旅行の経験を十分もち、過去に本学の教員の引率する研修ツアーを取り扱ったことがあり、我々の意図をよく理解してもらえる旅行会社として、ＪＴＢと近畿日本ツーリストの二社を選定し、二班に分けて研修旅行を実施することにした。

平成３年４月より、第一研究室と短期仏教科研究室所属の教員が中心になって、研修旅行への参加を全学的に呼びかけることになった。「谷大生ならインドへ行こう」というスローガンで、各教員は授業やゼミなどで研修旅行の趣旨を学生に訴えた。そのアピール文は次の如くである。

> 大谷大学は仏教精神によって建学されています。その仏教の発祥地はインドです。今から2,500年前に、インドに仏教が成立し、その後、仏教は世界の宗教として展開し、今日に至っています。その仏教の発祥地インドを訪れ、仏教の遺跡を見学することを主たる目的としているのが今回の研修旅行です。
>
> 今回は、仏陀釈尊が正覚を成し遂げられた地ブッダガヤー、最初の説法をされた初転法輪の地サールナート、無量寿経や観無量寿経などが説法された地ラージギル、三蔵法師玄奘が学んだナーランダー大学跡を中心に研修します。併せて、インドの文化を直接に見聞するために、博物館や文化的遺産を見学したり、インドの仏教研究者（大学教授）の講演を聴いたり、インドの大学生との交歓会を開くことも計画されています。
>
> 大谷大学の学生ならば、一度はインドに行きましょう。そして、日本にいては体験することのできない異文化に触れ、素晴らしい感動を共有しましょう。
>
> 文学部第一研究室・短期大学部仏教科研究室
>
> （研修旅行募集パンフレットより）

初年度の研修は、実施まで３カ月という短期間であったにもかかわらず、各教員が授業等で啓蒙したこともあり、かなりの反響があって、両班で合計120名ほどの志願者が集まった。しかし、第２班では、引率教員を含めると、70名以

上という参加者であったため、インド現地では貸し切りバス３台を連ねての移動となった。そのため、見学、集合等に時間がかかり、何かと不便を味わったという反省にたち、第２回目、平成３年度の研修では各班の定員をそれぞれ50名に限って募集をすることになった。そのため、募集の段階で、早い時期に定員をオーバーし、公募を中断するという事態になった。

いずれにせよ、当初の願い通り、別表の如く、真宗学・仏教学・短期仏教科だけでなく、他の学科からも予想以上の学生が賛同してくれたのである。特に、女子学生の参加が多かったのは、大学研究室という公の主体の実施する旅行に保護者の側も信頼を寄せてくれたからであろう。

２　研修旅行実施の概要

以上の主旨により、本年度まで２回、夏期休暇中にそれぞれ２班に分けてインド研究旅行を実施し、現地において引率教員が講義や実地指導を行った。

◎第１回（平成３年度）　118名（男子52、女子66）：カルカッタ、ナーランダー、王舎城（ラージギル）、ブッダガヤー、ベナレス、サールナート、アグラ、デリー、インドの大学生との交歓会。

第１班　８月24日～９月２日

第２班　８月31日～９月８日

※第１回の研修実施結果の報告については、吉元信行「インド・出会いの風光―大谷大学第一研究室・短期仏教科企画　第一回大谷大学　インド仏跡研修旅行報告―」仏教学セミナー54号を参照されたい。

◎第２回（平成４年度）　101名（男子40、女子61）：パトナ、ナーランダー、王舎城、ブッダガヤー、ベナレス、サールナート、クシナガラ、ルンビニー、カピラ城、サヘート・マヘート、アグラ、デリー、インドの大学生との交歓会。

第１班　９月９日～９月20日

第２班　９月16日～27日

引率者　教員：各班とも４～５名、ほか、事務職員１名、添乗員２名、現場ガイド数名。

☆ **第1回研修**（平成3年度）

①参加人員（引率教職員・添乗員・ガイドを除く）

1班　48名（内　男子18名、女子30名）

2班　70名（内　男子34名、女子36名）

②回生・学科別（一、二班合計）

回生	1	2	3	4	その他	計
真宗学科	2	3	3	10		18
仏教学科	6	6	17	14		43
哲学科	1	1	1	1		4
社会学科	1	3	2	2		8
史学科	0	2	3			5
文学科	1	1	2			4
短期仏教科	12	10				22
短期国文科	2	0				2
修士課程*	5	1				6
博士課程**	1	0				1
ＯＢその他					4	4
合計	31	27	28	27	4	117

*　真宗学専攻4　仏教学専攻2

**　仏教学専攻1

③引率者

1班　　引率：団長＝小川一乗教授、吉元信行助教授、宮下晴輝専任講師、柏倉明裕特別研修員。大学派遣：松原文孝幹事。

2班　　引率：団長＝長崎法潤教授、神戸和麿教授、延塚知道助教授、一楽真助手、木越康特別研修員。大学派遣：阿部彰雄主任。

☆ **第2回研修**（平成4年度）

①参加人員（引率教職員・添乗員・ガイドを除く）

1班　52名（内　男子19名、女子30名）

2班　49名（内　男子19名、女子30名）

②回生・学科別（１、２班合計）

回生	1	2	3	4	その他	計
真宗学科	3	1	4	10		18
仏教学科	10	2	7	1		20
哲学科	1	3	3	1		8
社会学科	0	0	0	1		1
史学科	1	0	1	5		7
文学科	0	2	0	1		3
短期仏教科	23	10				33
短期国文科		2				2
短期文化学科	5					5
修士課程	0	0				0
博士課程*	0	1	0			1
ＯＢその他					2	2
合計	43	22	15	19	2	101

＊　仏教学専攻

③引率者

１班引率：団長＝小野蓮明教授、宮下晴輝助教授、一色順心助教授、福田琢特別研修員。大学派遣：水谷賢雄幹事。

２班　　引率：団長＝三桐慈海教授、吉元信行助教授、藤嶽明信専任講師、藤原正寿特別研修員。大学派遣：中村雅亮幹事、東祥司大学専属カメラマン。

このことに気をよくした我々は、大学側に援助等の積極的協力を要請した。大学としても、その意義をよく理解し、実施準備に要する費用や引率者の旅費援助等の資金援助をはじめ、各班に１名ずつの事務職員の派遣、旅行期間を含めた前後の学生課職員の待機、学長や学生部長をはじめとする大学当局の支援などを含めて、大学主催に準ずる扱いになった。

研修旅行は、二班に別れ、各年度とも、１週間の間をあけて、１班はＪＴＢ団体旅行京都支店、２班は近畿日本ツーリスト京都河原町支店の主催によって行われた。両年度の主要研修日程は次の如くである。

①第1回（平成3年度）研修日程表

1・2班共通事項				1班		2班	
日次	地名	交通機関	摘　要	月日	摘　要	月日	摘　要
1	成田発 カルカッタ着	AI 309便	（カルカッタ泊）	8/24		8/31	台風で成田空港はひどい暴風雨
2	カルカッタ発	貸切バス 夜行列車	カルカッタ市内研修：ビクトリア記念堂、カーリー・ガート寺院、ジャイナ教寺院、フグリー川、ウイリアム要塞、国立インド博物館見学 （寝台列車車中泊）	8/25	インド博物館では、肝心のバールフート・コーナーが停電で鑑賞できず カメラ盗難事件	9/1	
3	パトナ着発 ナーランダー ラージギル ブッダガヤー着	貸切バス	ナーランダー仏教大学跡・ナーランダー考古博物館見学、霊鷲山・王舎城牢獄跡、竹林精舎、王舎城外壁見学 （ブッダガヤー泊）	8/26		9/2	
4	ブッダガヤー発 ベナレス着	貸切バス	大精舎参拝、尼連禅河見学ビハール平原の景色を楽しみながら一路ベナレスへ （ベナレス泊）	8/27		9/3	大渋帯で途中7時間の足止めをくう[3]
5	ベナレス	貸切バス	迎仏塔、サールナート遺跡、サールナート考古博物館見学 各自市内見学（自由行動） （ベナレス泊）	8/28	夜、団員親睦会：自己紹介・感話等	9/4	深夜到着のため、午前中休養
6	ベナレス発 アグラ着	貸切バス IC 497便	早朝ガンジス河沐浴見学 午前中自由行動 飛行機でアグラへ （アグラ泊）	8/29	ハニラトマータ寺院見学 飛行機悪天候のため2時間遅れ	9/5	学生2名沐浴
7	アグラ発 デリー着	貸切バス	タージマハル、アグラ城見学 ネルー大学学生との交歓会：夜12時頃まで （デリー泊）	8/30	1号車追突事故に会うが大事にいたらず	9/6	ネルー大学生のほとんどが女子学生でサリー姿にうっとり

8	デリー・ニューデリー	貸切バス	フマユーン廟、ガンジー廟、レッドフォート見学、昼食に「タンドリー」で純インド料理	8/31	予定外のもう一泊[1)] ガンジー記念館・クトゥブミナール見学 （ホテルで反省会） （デリー泊）	9/7	ニューデリー国立博物館見学[4)] AI 308便にてデリー発 （機中泊）
9				9/1	ニューデリー国立博物館見学 バザールでショッピング[2)] AI 308便にてデリー発（機中泊）	9/8	大阪・成田着
10				9/2	大阪・成田着		

1）第１班では、出発予定のエア・インディア機が24時間遅れることになり、１日帰国が遅れることになった。このニュースを聞いた学生達、全員が大喜びで大喝采。みんながインドの虜になっていた証拠。もちろん、１日分の滞在費は航空会社持ち。

2）第１班では、一度バザールで買い物をしたいというみんなのたっての願いで、バスは郊外のバザールに横付け、カレーや日用品、装飾品など、品物の豊富さと安さに一同びっくり、ここでようやく純インドの雰囲気を味わった。ところが、買い物に夢中で、集合時間に20分も遅れた女子学生が一人、あわや行方不明と、これには一同肝を冷やしたことである。団体行動の鉄則は集合時間の厳守、要注意。

3）第２班では、ブッダガヤーを出発してから約30分後、大渋滞に巻き込まれる。殺人事件に関わる村人の抗議行動が原因。我々も結果的にその抗議行動に加わったことになったようである。ただ、周りを散歩したり、昼寝したり、インドの人たちと歓談したり、思わぬ収穫もあった。ただ、ホテルに着いたのは、深夜２時、しかし、ホテルでは食事の用意をして、ちゃんと待ってくれていたのには感激。

4）第２班では、夕方出国のため、時間の都合で、博物館見学組と市内観光組に別れて行動。この点、１班の出国１日延期は、研修する側にとってはまことに好都合であった。

※本表の作成は、柏倉明裕（１班参加）・木越康（２班参加）両特別研修員の協力によった。

②第2回（平成4年度）研修日程表

1・2班共通事項				1班		2班	
日次	地名	交通機関	摘　要	月日	摘　要	月日	摘　要
1	大阪発 AI 355便		（デリー泊）	9/09		9/16	
2	デリー発 パトナ着	AI 809便 貸切バス	パトナ市内及びクムラハール遺跡見学 （パトナ泊）	9/10	雨のため飛行機が3時間ほど遅れる	9/17	
3	パトナ発 ナーランダー ラージギル ブッダガヤー着	貸切バス	ナーランダー仏教大学跡・ナーランダー考古学博物館見学 霊鷲山・王舎城牢獄跡、竹林精舎、王舎城外壁見学 （ブッダガヤー泊）	9/11	バスのエアコンが故障し、体調をこわす人が出る	9/18	
4	ブッダガヤー発 ベナレス着	貸切バス	大精舎参拝、尼連禅河見学 ビハール平原の景色を楽しみながら一路ベナレスへ （ベナレス泊）	9/12	強行軍のため学生たちに最初の疲れの色が見え始める。	9/19	1班に同じ
5	ベナレス	貸切バス	早朝ガンジス河沐浴見学、ベナレス市内見学：ドゥルガ寺院ほか 迎仏塔、サールナート遺跡、サールナート考古博物館見学 （ベナレス泊）	9/13	午後自由行動になったが、日曜日のためほとんどの店が閉まっている。病人が出て医師往診	9/20	学生数人が沐浴を試みるが、ガンジス河増水のため断念。絹織物工場見学
6	ベナレス発 クシナガラ着	貸切バス	山一つないガンジス平原の車窓を楽しみながらクシナガラへ クシナガラ遺跡、涅槃堂参拝、ラマバル塚見学 （クシナガラ泊）	9/14	珍しく雨にあう	9/21	キャンプファイアを囲んで歓談蛍の乱舞に一同うっとり
7	クシナガラ発 ルンビニー着	貸切バス	陸路で印ネ国境通過を経験 釈尊生誕の地ルンビニー聖地・マーヤー夫人堂参拝： （ルンビニー泊）	9/15	みんなで蛍を見に出かける。	9/22	子供の自転車に学生が乗ったら壊れて問題になる[1]

8	ルンビニー発 バルランプール着	貸切バス	宿舎の日本式ホテルで一同満足[2)] カピラ城遺跡の一つピプラハワー・ガンワリヤ遺跡見学、印ネ国境線沿いに一路西へ （バルランプール泊）	9/16		9/23	朝、視界ゼロに近い霧 夕方下町でショッピング、夜キャンプファイアーパーティー[3)]
9	バルランプール発 ラクノー経由 デリー着	貸切バス IC 436	サヘートマヘート（祇園精舎・舎衛城遺跡）見学 （デリー泊）	9/17		9/24	
10	デリー発 アグラ着発 デリー着	特急列車 貸切バス 特急列車	タージマハル、アグラ城見学 ファティプール・シクリ城見学 ショッピング （デリー泊）	9/18		9/25	
11	デリー発	貸切バス	デリー・ニューデリー市内見学 ネルー大学生との交歓会 機中泊）	9/19	終日自由行動	9/26	飛行機のオーバーブッキングのためスタッフ4名デリーに残る[4)]
12			大阪着	9/20		9/27	

1）ただし、この自転車は始めから壊れていた可能性があり。周りのネパール人の大人が大勢集まってきて、相当険悪な雰囲気になったが、現地ガイドの取りなしで修理費を支払うことで解決。インドでは人のものを簡単に借りないように注意しよう。

2）日本式ホテルでは、すべて日本料理で、風呂も大浴場で、畳の部屋に布団。ただし、何となく安心感から、食べ過ぎたり、日本製クーラーが利きすぎて、体調を悪くしたものあり：油断大敵。

3）有志でリキシャに乗り、バルランプール町内のバザールを見学。夜は、クシナガラと同様にホテルには他の宿泊客はいなかったため、２回目のキャンプファイアーを楽しむ。歌も飛び出し、夜遅くまで満天の星と蛍の飛ぶインドの夜を楽しむ。

4）デリー空港で搭乗直前に、オーバーブッキングにより、４名が搭乗できないことが判明、相談の結果、学生はどうしても帰国させたいとの判断から、スタッフ３名と添乗員１名が残ることにした。４名のスーツケースはすでに飛行機の中に入っており、４名は手ぶらで急遽ホテルへ。苦心の結果、翌日28日ＪＡＬ便にて成田空港経由大阪に帰着する。

※本表の作成は、福田琢（１班参加）・藤原正寿（２班参加）両特別研修員の協力によった。

3　学生たちによる異文化との出会い

本研修は、出発直前の本学における結団式に始まる。この研修旅行に託する本学の願いは、結団式における次のような学長や団長の挨拶の一部に集約されよう。

第一は何と言っても仏教あるいはお釈迦さんですね。これへの思いをお持ち頂ければと思います。釈尊、お釈迦様を求めた人間の現実がどういうことであったのかということへの思いを持って頂きたいということと、仏教を求めたけれども、ついには仏教を滅ぼしたと言いましょうか、捨てたインドの人達の現実、それをもよく見て下されば と思います。皆さんが行かれますと、仏教関係のものは完全な廃虚と申しますか、遺跡があるだけでございます。

しかし、ブダガヤへ行くとチベットの人達が敬虔な思いで集まっておられます。ブダガヤにもチベットのお寺があります。そこへも多分遥々チベットから巡礼に来ている人もおられると思いますから、ラサから千キロの道を通って仏陀を慕って巡礼にくる人達の想いがどういうものであるか、話は多分通じないでしょうが、それを感じとって下されば と思います。

（第２回結団式寺川学長挨拶筆録より、平成４年９月）

私たちが、普段の学びをいわば現地で学ぶというそういうことが一つあるでしょうし、もう一つはインドという大地に立つことによって、私たちが見られない、あるいは気づかなかったそういう日本の現実と申しましょうか、私たちの生活といいましょうか、異文化に触れることによって、逆に日本の現実を教えられるということがあるのではないかと思います。こんなことは私が言葉で言うよりも、身を運んで大地で折々にまた話し合って実感していきたいと思います。　（第２回結団式小野蓮明団長挨拶筆録より、平成４年９月）

学生たちのインドとの出会いは、空港の飛行機の機内に入ったときから始まる。フライトは「エアー・インディア」であり、サリーを身につけたスチュワーデスの笑顔に充ちた挨拶に、ほとんどが初めての海外旅行となる学生諸君の目はもう輝いている。独特の香料の香りがして、ヒンディー語のアナウンスが入るともう機内な完全にインドである。筆者も初めてインド旅行のときは、この異文化との出会いの感激に酔いしれて、その印象があまりにも強烈であっただけに、あっという間に旅行が終わり、気がついたときにはもう日本に帰国していたことを思い出していた。

筆者は第１回初年度は第１班、第２回目には第２班の引率と研修指導に当た

ったので、いくつかの気づいたことなどについて述べてみよう。

初年度の研修では、我々の飛行機は、インド第一の大都市カルカッタのダムダム空港に到着した。学生諸君はまず、出発の成田空港に比べてあまりに汚いこの空港に驚く。そして入国手続きの窓口で、役人と添乗員の間で人知れず高級ウイスキーやたばこが取り交わされているのにびっくりする。

空港ロビーに出ると、痩せて黒く目だけぎょろぎょろした人たちが、何か手伝うことはないかと話しかけてくる。ちょっと荷物に触れただけで、もってあげたからチップをくれと言われ、途方にくれている女子学生。個人か団体かを聞いて、個人ならタクシーに乗せようとする強引な客引きたち。今までならば、大勢の物乞いが押し掛けてきたのだが、今回はインドの玄関でその洗礼に合うことはなかったのは幸いと言うべきか、あるいは、期待外れと言うべきか。インドの経済状態は、少しずつでも好転しているのか、それとも当局の取り締りによるのであろうか。カルカッタの街は、イギリスの植民地時代に発展した都会であるだけに、インドの縮図とさえ言われる。西洋と東洋、古代と現代、科学と自然、高級自動車と人力車や牛車、大金持ちと難民や低所得者、肌の色や風貌の異なった様々な人種の人たちと、あらゆるものが混在した文明の坩堝ともいえるところである。

空港からホテルへの道筋で、道端でごろごろ寝ている路上生活者や物陰さえあればへばりつくように組み立てられた難民のテントに目を凝らし、そして、目を見張るばかりの五つ星の一流ホテルに着いて、ジーパンや単パンにズックという出で立ちの自分たちの姿で入れるのかと本気で心配している学生。

第２回目のインド研修では、我々は大阪国際空港を離陸し、インドの玄関、ニューデリーの空港に到着した。第１回のカルカッタの雑然とした薄汚い空港とは異なって、整然とした近代的な空港であった。また、翌朝すぐにパトナへと飛び立つため、我々は空港近くのホテルに宿泊せざるを得なかったため、まったくインドに来たという実感がなく、本当のインドの実感は翌日のパトナから始まることになった。この研修の目的の一つに学生たちにカルチャーショックを味わせることがあるとすると、やはり最もインドらしい街であるカルカッタにまず入るのがより効果的であろう。第１回研修参加の学生たちは、カルカッタで次のように感じている。

☆学生Ａ（第１回研修）

カルカッタに着いて、空港の外に出ると、いきなり物乞いが寄ってきて、手を差し伸べてきて、何もかも恐くって表情を固くしてNo！といいながら、どうしてここまで来てしまったのだろうか、という感じでカルチャー・ショックのあまり、泣きそうだったけれども、パトナ、ブッダガヤー、ベナレスへ行くにつれて、自分の一番見たかったインドが見えてきて身体も心もインドのペースに馴れてきた。中でも、ベナレスでオートリクシャに乗って、町へ出たことは印象に強く残っている。

カルカッタの市内観光でまず対照的なのは、大英帝国統治時代の華麗なビクトリア記念館と古来のインドの臭いの込められたカーリー寺院であろう。ビクトリア記念館前の緑一色の広大な庭を散策しながら、白いヨーロッパ風の建物を仰ぐと、まさにヨーロッパにいるのではないかという錯覚を覚える。そして、その足で30分もしないうちに、なんともいえない臭いのするスラムのようなところに降り立つ。物乞いたちが列をなして手を差し出している路地を歩いたところに有名なカーリー寺院がある。カーリー・ガートという宗教的聖地で、カルカッタという地名はこの聖地名の訛った呼称である。

この寺院には、シヴァ神の妃の一人で、黒い顔、裂けた赤い口から血の滴る舌を出し、男の生首を串刺しにした首飾りを身につけ、片手に剣、片手に男の生首をかざした残忍でグロテスクな女神が祭られている。大勢の信者が詰めかけ、狭い境内は芋の子を洗うようである。神殿の前には、生け贄の山羊の首をはねる鉄製の台があり、そこにはねっとりと血がこびりつき、黒くなるほど蠅がたかり、烏や禿げ鷹がそれをじっと見つめている。この光景に何人かの女子学生が気分が悪くなったというのもうなずける。このカーリー女神は、ベンガル地方において最も人気のある女神というから不思議である。この神殿を見て、ある学生は次のように言う。

☆学生B（第１回研修）

インドの文化や生活に触れることによって、今までに考えたことないことを考えさせられました。カルカッタに到着した時、空港内の様子が日本と違うのでたいへんびっくりしました。外に出ると現地の人々に集まってこられ、「ボールペンはないか？　ライターないか？」という声も聞きました。

カーリー・ガート寺院では犠牲の儀式をしていました。山羊の首を切り、家族の幸せを祈る儀式なのです。

カーリー寺院本殿の真裏には、サボテンのような異様な木を御神体とした小

さい祠がある。ここにも大勢老若男女が押しかけて、寸分の隙間もないくらいである。その御神体には様々な色の願い事を書いたお札のようなものがぎっしりとぶら下がって、それぞれの信者たちが様々なお祈りをしている。おそらくインド古来よりあった樹神信仰の神であろうが、このようなところにいい知れぬインドの人々のエネルギーというものを肌で感ずる。しかし、よく考えてみると、これによく似た光景を昔の田舎の祭などで見たような気がして、なにか異文化でないような気がしたのは筆者一人であろうか。

今から８年ほど前のこと、筆者は20人ほどの学生を引率して仏跡を訪れたことがある。そのときも、この２回の研修と同じブッダガヤーのトラベラーズ・ロッジ（現在は、ホテル・ブダガヤ・アショークという名前に変わって、建物も増築改修されている）に宿泊したのであるが、その夜のこと、ご多分に漏れず、停電になった。そこで、ろうそくをつけようとしていたとき、ロッジの中庭の方から「キャー」という女子学生の声が聞こえたので、スワッ一大事と外に飛び出してみた。するとどうだろう、男女の学生達がみんな中庭に出て、空を見上げているではないか。思わず空を見ると、何と、満天がまさに宝石を散りばめたような星のカーテンである。スバルの星雲の星の一つ一つが見える。広大な天の川が空を横切る。数え切れないなんていう形容さえできないような星星であった。ちょうど新月であり、停電のため、周りはまったく明かりのない世界である。一時間ほどの停電時間が何と短かったことか。学生たちの中には涙さえ浮かべて感激している者もいる。帰国してからも、このときの学生と会うと、その感動の思い出が語り草になる。

筆者はそのときのインドで考えたことである。このような星の美しさを自分の幼い頃に田舎で見たような気がすると。ひょっとしたら、彼ら学生たちは、その両親が幼いときに星を見て感激したそのことをインドにきて体験しているのではないかと。

この度学生たちとインドに来て、筆者はこのような場面に何回も遭遇した。この２回の研修では、雨期であったため、乾期のような美しい星空は望めなかったが、そのかわり、日本にはほとんど見られない蛍の乱舞に遭遇した。そして、インドは貧しい、インドの子供たちは純真だ、その目がなんともきれいである、痩せた足で力いっぱいリキ車のペダルを踏む車夫、頭に自分の図体より大きい薪の束を乗せてひたすらに歩むサリーの女性、メインストリートの車の

流れの中に平然と寝そべる牛、牛車・リキ車・自転車・自動車、そして人間が一つの道の中でひしめき合っている、動物たちと人々の仲良く共存している様、雨期の道路は至るところがどぶとなって牛が気の赴くままに糞をし、その同じ路上で人が生活している、こういうインドの様々な姿に学生たちはいたく感動する。

☆学生C（第２回）

まず、印象に残ったのは田舎の子供の純真さ。あんな目をした子供たちはまず日本ではお目にかかれない。心が洗われる。それに対し、都市の人はやはり目がくすんでいた。日本でも同じことが言えると思う。インドも徐々に都市化が進んでいくようだ。文化が発展するのは良いことなのだろうが、他に進むべき道があるのではないかと思った。釈尊の歩かれた範囲があまりに広かった。命懸けというのでも物足りないような熱意が感じられた。そして、その文化が全く途絶えてしまったというのも、一つのこれも法の姿だなと思った。これが体験でき、人生を見つめなおすことができたのが良かった。そういう意味でバスの長時間移動も大変良かったと思う。全般に、することなすこと初めての体験なのでおもしろかったと思う。

ある学生は、すっかりインドの虜になって、次のように述べている。

☆学生D（第１回）

バスに群がる物乞いたち、インドの路上生活者たち、街並、また、宗教、文化、見るべきもの、学ぶべきもの、感じること、驚くことが一気に私の眼前に広がる。カルカッタに着いたときには、正直、何がなんだかわからず、ただ、目が点であった。おまけに水は飲めないし、知らぬまになっちゃってしまっている下痢！。

「インド病」という言葉がある。私がインドで目の当たりにした「最低の世界」（我々日本がきれいで豊かで最高だと定義して）を見ながら、何か引かれるものがあった。知っても知っても知り尽くせない深さがあるのだと思った。日本は便利を求めるうちに味気ない生活をしている。はたして我々は、心は豊かなのだろうか。インドは生き生きしていた。インドは怖かった。でも、面白かった。インドは最低だった。でも、最高だった。インドへは、またきっと絶対に行きたい。

また別の学生は、尼連禅河とベナレスのガートでの体験を次のように述べている。

☆学生E（第１回）

尼連禅河で子供たちと少し遊びました。言葉は違いますが、子供のあのいい

笑顔は忘れられません。少し川岸を歩いていたのですが、足元では、バリバリという音がします。気にせずにあるいていたのです。よく見てみると、骨なのです。牛か犬の骨なのでしょうか。それは何ものでもありません、人の骨だったのです。私はショックでした。今までこのような体験をしたことがなかったからです。

聖地ベナレスでは午前四時半に起き、ガンジス河の沐浴風景を見に行きました。まだ薄暗かったのですが、インドの人は早起きで、棒のようなものを口に入れて歯を磨いています。レストラン（日本のレストランのようなものではありません）ではカレーを作っていました。子供や大人達が花や線香を売っています。ボートに乗り、ガンジス河で沐浴している人達を見ました。本当にガンジス河は広大で、また土色をした水は勢いよく流れていました。遠くの方から光が見えて来ました。一日がまた始まるのです。そうして、ボートに乗っていると、川岸には煙が上がっています。空には禿げ鷹が飛んでいます。川岸では火葬が行われていたのです。インドの火葬とは、薪の上に死体を置いて、そのまま焼きます。私は、死体の足が焼けていく様子を実際見てしまいました。私自身忘れて考えない死をインドの人はそのまま受け入れている強さに感動しました。

このほか、インドという異文化にふれた感動に関する感想文をいくつか紹介してみよう。

☆学生F（第２回）

とにかくインドはすごい。日本の中だけで生活してきて、固定観念があって、それがいっきに打ち砕かれた。インドの町は、牛も車も犬も自転車も人々も、みんなごちゃまぜで騒然としている。道の真ん中で、ノター、としている牛、それをうまく避けながら通る車、みんな一緒に生活していてとてもあったかい感じがした。あと物売りのパワーはすさまじい。断っても断ってもしつこくつきまとい、まとわりついてくる。そしてその人が買わないとわかったらすぐ次の客をさがす。でも、貧しい人たちはあのまま一生貧しいままで抜けられないのかな。

☆学生G（第２回）

一番印象的なのは日本とインドの文化の違いだった。インドの人の生活をみて心が痛むことも少なくなかったし、涙が自然にでてくることもあった。だってただ貧しいとかだけでなく、「生きよう」「生きたい」という願いというかパワーがみなぎっていて、言葉で表すことが出来ないほど感動しました。仏跡をめぐるのも一つの勉強でしたが、何かもっと大事なことを学んだような気がします。本当に参加して良かった。

しかし、こういう様相も、筆者の子供の頃にはごく普通に日本でも見られた光景ではなかったか。インドで感ずる異文化とは、案外我々の心の故郷ではなかったのか。日本人の多くがインドに感ずる魅力の秘密がこのようなところにもあるのではないかと思う。実は、このようなことについて気がついていたと思われるある熟年の学生の感想文を紹介しよう。この人は、会社を定年退職して、本学に入学してきた学生である。

☆第１回研修時文学部２回生　西岡昭一氏

インド旅行の印象については、大谷大学広報（３－３号、p.7）に書いたとおりである。ただ、今になってよく考えてみると、あれほどショックを受けたインドの貧しさも、我々が子供の時代に経験した戦前の日本の貧しさとさほど変わっていないということに気がついた。物乞いは清水寺にも本願寺にもたくさんいたし、スラム同様の長屋もたくさんあった。戦後の豊かさにならされて忘れていただけのことだった。それでも当時、私たちが貧しくても飢えることなく、心の上ではあるいは今よりもはるかに豊に生きていたように、私が見たインドの貧しい人も飢えてはいなかったし、そしてみな明るかった。インドはアフリカではなかった。

ところで、私はあの旅行のおかげで異国のガールフレンドができた。ネール大学のお嬢さんから、今日現在、誕生祝いと年賀状の他に３通の手紙をもらっている。彼女は去年の11月に韓国のソウルで催された世界大学美人コンテストに出場した麗人である。私は今年64歳になろうとしているが、彼女に返事を書くときには、昔ラブレターを書いたときのように胸を躍らせている。そして、それをまずい英文にする度に徹夜の苦労をいとわないでいる自分に苦笑するのである。（『《ナマステー》大谷大学インド研修旅行記1991年版』、pp. 42-43）。

このようなことに気づき、さらに、インドの人々の素晴らしさに目を開いた次のような学生の感想文は、この研修旅行の成果をよく示してくれるものであろう。

☆学生Ｈ（第１回）

まず、インドは、昔の日本のような状態だったこと、人力車などが走り、オートリキ車（三輪車）がタクシー代わりです。男の人たちは、午後２～３時頃でも井戸端会議をしていて、そうかと思えば、大学生が学生運動をしています。貧しいけれども、あったかい、そんな目をしています。日本の子供のようにいい服は着ていないけれど、みんな外で動物たちと一緒に遊んでいます。なにか、もしかしたら、私たちが忘れてしまったものを持っている国なのかも知れません。（インド人の）ガイドさんが「私はインドが大好きです。もっともっといい

国にしたい、日本のみなさんも応援してください」と言われました。自分の国が大好きだと思うこと、それが一番この人たちの輝いている要因なんだなあと実感しました。

また、ある学生は、次のように述懐している。

☆学生Ｉ（第１回）

本で読んだり写真を見ただけのイメージは、実際に目で見て、音を聞き、その地を歩いて感じるものの前では、何の意味も持たないような気がした。自分達の暮しと本当に異なったインドでの人々の暮しや風土、文化にすごいカルチャーショックを受けた。私が特に強く感じたのは、人々の暮しがとても生命感に溢れているなあということ。子供も、大人も、老人も、皆明るく自分の人生を受けとめている感じがした。貧しさ、教育を受ける事ができない、衛生、病気等の身近で重要な問題を彼らが抱えているのはもちろんだ。日本の私たちには考えにくい程、問題は大きいと思う。それがある上に成り立つあの生命感、明るさはどこから来るのかと思った。80％以上の人々が同じ宗教を信じているわけだが、その母なるガンジス河を私自身が目にして、人々の心には人生の流れ、また過去からつながり、未来へと続く永遠の自分といったものが確固として、そして、そういう思いを内に持つインドの人々は安らぎ、強さを持つことができるだろうと思った。

釈迦の悟りを開いた地、ブッダガヤーや、初転法輪の地を訪れ、生きることにおいて必ず現れる悩みから解放されるということはどういうことなのかということについてあらためて考えることになった。

雨期に行ったので、緑にあふれたインドの大地を見ることができ、自分の知っている世界の狭さを思い知り、雄大な世界に立った自分自身の小ささを感じた。

今回のインド旅行は私にとっては、自分の生き方を振り返って考える機会になり、とても楽しく有意義な旅だったと思う。

4　仏跡見学の意義

第１回の研修旅行で訪れることのできた仏跡はほんの一部にしか過ぎなかった。しかし、仏教の成立にとって最も重要な成道の地ブッダガヤー、初転法輪の地サールナート、ブッダが最も長く滞在した場所であるといわれる王舎城の諸遺跡、仏教学発祥の地ナーランダー大学跡など、ブッダの生涯並びに仏教の歴史における重要な聖地をこの足で踏むことができた。第２回では、第１回の反省から、少し日程を増やし、さらにアショーカ王の王宮跡とも、第三結集の

鶏園寺跡とも言われるクムラハール遺跡、入滅の地クシナガラ、誕生の地ルンビニー、生育の地カピラ域、祇園精舎のあるサヘート・マヘートなどを加えることができた。このことは、講義で、あるいは書物の上で仏教を学ぶこととはまったく違った意味を持っている。しかも、時間の都合で訪れることはできなかったけれども、尼連禅河の岸からは、苦行の地前正覚山や苦行林、あるいは、苦行を放棄したブッダに乳粥を捧げたスジャーターの村を目の当たりに望み、仏伝の物語に思いを馳せたりすることができた。

この仏跡に感じた学生諸君の感情は様々であろう。中には、仏跡を自分が写る写真の背景にしか考えていないような学生もいた。あの王舎城の悲劇で有名な七重の牢獄跡の石積みの上に立って写真にポーズをとっていた学生が、牢獄跡の真ん中の芝生の上に坐って遥か霊鷲山を仰ぎ、何分間も黙想をしていたあるＯＢ参加者の姿を見て何を感じたであろうか。

筆者はこの学生を非難しているのではない。それはそれでいいと思う。ただ、この学生が大学に帰って、仏伝の講義を聞いたとき、あるいは、観無量寿経をひもといたとき、この聖地に立ったことのない学生とはまったく違った感動を覚えるに違いないと思う。仏跡はまさにそのような力を持っているのである。ある学生が次のように述べているのは、このことを示すものである。

☆学生Ｊ（第１回）

教職をとるということもあって、ろくに自分自身の勉強もしないでインドに行って、少し恥ずかしく思いました。けど反対に、周りの人々にインドの写真を見せて説明しなければならなくなり、テレビ番組や一緒に行った仲間たちにいろいろ教えてもらい、だんだん知っていくうちに自ら図書館へ行って本を借りたり、大阪の国立民族博物館へ行って、いろいろな展示物にふれ、なにかとても嬉しくなりました。

また、学生たちのアンケート調査の中で、次のような意見を述べている。

☆学生Ｋ（第１回）

釈尊が入滅された時の姿の像がすごく印象的で心が落ち着いた。まわりにはなにもない夜にはホタルと満天の星、こんな気持ちの落ち着くところがあるだろうかと感動した。

☆学生Ｌ（第１回）

仏教の勉強が四ヶ月弱しかできなくて、よく理解できなかったのでインドへ行っても「お釈迦様がどうの、こうの」と言われても、あまり実感がわかなかったので、インドへ来た意味がないと思い、残念に思いました。でも、インド

では昔、ものすごく仏教を信仰していて、釈尊を敬っていたということは、遺跡を見て、ひしひしと感じてきました。広大なインドと、遺跡の偉大さに感動していました。これから、もっと仏教のことを勉強して、もう一度インドへ行きたいと思います。

ところで、第２回研修で、筆者が仏跡で学生たちにインタビューした録音テープの筆録のうち、バルランプールで収録したそのごく一部を紹介しておこう。

（学生１）「素朴なインドが好き。」
（学生２）「ごっつう、すごいとこやと思います。」
（筆者）「どこが？」
（学生２）「どこがって、全部が。なん百年も前のものがそのまま残ってるとこなんか。」
（学生１）「それから遺跡とかそういうものがむきだしで置いてあるのがすごい。」
（筆者）「ああ、あれ持って行ってもわからんくらいだもんね」
（学生１）「だから誰がはいったってわからへんなあと思う。」
（学生２）「良い感じや。」
（筆者）「あ、そう。よかったねぇ。」
（学生２）「あのルピー、ルピーっていうのさえ無ければもっとええ感じやわ。」
（口々に「そうだ、そうだ」という声）
（筆者）「あれ、ブッダガヤーなんかで嫌やろ？　付きまとわれるの？」
（学生２）「せっかく感動しながら見てんのに、ああいうふうに言われたら…」
（学生１）「その点、ルンビニーもましやったし、それから今日のピプラハワーあたりもね。」
（学生２）「それから、あのネパールの辺りの。あの辺はいいなあと思った。」
（筆者）「そう。ということはね、日本人が駄目にしてんのよ。それで向こうの子ども達があんなになっちゃうのよ。」
（学生２）「困ったもんや。」
（学生１）「それともう一つ、宗教と生活が密着していたんがすごいかなあと。」
（筆者）「一番感動したことを一言。」
（学生３）「山に登ってから、上で勤行した時にすごく感動しました。」
（学生４）「ブッダガヤーの金剛宝座ですか、あそこすごく感動しましたよ。」
（学生３）「歩いてホテルに帰れる所があったでしょ。」
（筆者）「ああ、クシナガラ。」
（学生３）「あそこでお賽銭を渡したら、この位の仏像のかわらけみたいなのくれたんですよね。で、それを持って歩いてて、そしたらちっちゃい子が草刈り

してたんですよ。歌を歌ってたんで、もう一回歌ってとか言っても歌ってくれなかったんです。でも、カメラを持ってたんでちょこちょこ付いてきてて、それで出る時に三帰依文を言ったんですよ「ブッダン・サラナン」とか何とか。ええっとか思って、もう一回言ってっていったら、やっぱりそうなんですよね。もうびっくりしちゃって思わず涙が出てきちゃった。」

(筆者)「入学式の時に寺川学長が唱えたでしょう。」

(学生3)「だから一応先生に聞いてみたんですよ、同じ言葉やでって。だけどほんとにそうだとは思わなくて。」

(筆者)「そりゃあ、あれはパーリ語やもの、あれは仏陀がしゃべってた言葉に一番近い言葉やもの。」

(学生3)「え、そうなんですか。子どもがそんな、口ずさむようなもんじゃないと思ってたから。」

(筆者)「みんな、お参りに来てね、南方仏教のスリランカ、タイ、ビルマとかそういう所の人はみんな Buddhaṃ Saraṇaṃ Gacchāmi とやるわけ、それで『門前の小僧習わぬ経を読む』でおそらく覚えたんやろ。それはよかったね。」

(学生4)「ナーランダ大学の規模もすごかった、大きくてびっくりした。」

(筆者)「あの規模はすごいわね、五世紀位から十世紀位まで栄えた。」

(学生4)「こんな暑い所でよう勉強しはる。」

(学生3)「でもね、そうやって聞いた後に、やっぱり1ルピーとか言ってくるんですよね。子どもがやたら増えちゃってどうしようかっていってたら、友達がビスケット持ってて、これあげようかって、バスに取りに行って戻ったら、もうすごいんですよ、うわあーって、鳩かなんかが取りに来たみたいで。びっくりしちゃって目が点になっちゃって。」

とくに、この学生3がクシナガラの涅槃堂前で、子供たちが三帰依文を唱えているのを耳にした感動は強烈であったらしく、帰途の機内で書いた感想文にも次のように書いている。

☆学生3（第2回）

いっぱいありすぎて何を書いていいのか迷ってしまう。あえていうと、クシナガラで会った子ども。自然に「ブッダーン、サラナーン、ガッチャーミー」と三帰依文を口ずさんでいるのにはびっくりした。なぜだかわからないけど、涙がでてきた。それくらいこの事は私の中の何かを動かしたのである。しかし、その後「ルピー、ルピー」と何人かの子どもがせがむので、ビスケットを友だちに分けてあげようと思って出したら、うばいあい、まるで一つのえさに鳥が何羽もやってきて、むらがっているようだった。あまりのすさまじさに、あっという間だったがびっくりし、何がおこったのか一瞬わからなかった。怖かっ

た。先の出来事とのあまりの差に唖然としてしまった。ほかにも楽しかったこと、勉強になったことがたくさんあります。もう一度、是非機会があればインドに行きたいです。次はまた違う何かを感じることでしょう。

次に、引率教員たちが仏跡に立って、学生たちに述べた感話の筆録の一部を記しておこう。

☆引率教員 吉元助教授（第１回、王舎城・霊鷲山の香室の前にて）

ここが有名な王舎城（ラージャグリハ）にある霊鷲山という山の頂上です。霊鷲山とは、パーリ語でGijjhakūta、サンスクリット語でGṛdhrakūtaというふうに言いますが、ここが何故有名であるかというと、ここの下を見てもらいますと、あそこがちょうど昔のマガダ国の都王舎城の真ん中です。今は家一軒ありませんが、当時は大きな都であったんです。その王様が頻婆沙羅王で、その息子の阿闍世太子がクーデターを起こして、血腥い事件が起きた。それが有名な王舎城の悲劇です。その王舎城の悲劇の起こった頃、その頃ブッダは晩年であって、ブッダはこの山のこの場所（香室）におられたのです。そして、ブッダはここに比丘たちを集めて説法をされたということになっています。下の方から続いているあの道（ビンビサーラ・ロード）を通って、ここに、熱心な信者であった頻婆沙羅王がブッダの説法を聞きに来たし、また、最晩年には、後にブッダに教化された阿闍世王もやはり、ここに来たわけです。

ここに来た人は、ここに立っていろんなことを感じると思います。たとえば、原始仏教を専攻してきた私だったら、Mahāparinibbānasuttantaがここで説かれた。最晩年にここを出発点として、最後の旅路に出られて、クシナガラで入滅されたという、そういうことを思い起こします。また、大乗仏教を専攻している人ならば、この場所で『観無量寿経』や『法華経』が説かれたわけです。要するに、釈尊がここに長いことおられたので、いろんな説法が残されたということになっています。

この場所に立って、色々な気持ちで、それぞれの感慨を込めて、先ほど一同でお経を申し上げたところであります。

☆引率教員 三桐教授（第２回、ブッダガヤー、大精舎の菩提樹下にて）

この菩提樹の下で、釈尊がこの場で禅定に入られて、そして悟りを開かれた。その釈尊の悟りというのはいったい何だろうかということなんです。これはいろんな言い方が出来ますけれども、私は完全な平等っていうことで言えるんじゃないかと思うんですね。自分というものがあると、それは必ず差別につながっていくわけですが、その自分というものを否定する、否定するということは死ぬということでは決してないのであって、自我というもの、それを超えていくようなそういう体験というものを禅定の中でされて、そこで完全な平等とい

うものを自分の中に身に付けられた、そういうふうに言えるんじゃないかと思います。その完全な平等というものをどういうふうに私たちが体験するかというのは大変難しいのですけれど、しかしこれを目指して生きていく、そうすると思わぬところでこれに似た体験、類似体験が出来て、それがまた自分の人生というものを大きく展開させていく、そういう要素を持っていると思うんです。いろんな言い方が出来ます。まあ、釈尊の対機説法の中で無我ということを言われているわけですけれど、その無我ということを今のような言い方で出来るんじゃないかと思うんですね。このような場所に皆さんお参りなされた、どのような縁があってか、いろんなこの大きな縁の中で、皆さんここにお集まりになって、お参りなさることが出来た、と。その根本のものは何かと言うと、完全な平等というものを体験したいという気持ちが、心の深い奥底にあるんだということだと思うんですね。ですから私は宗教というものは必ず必要なものだというふうに、人間が生まれた限りに於て宗教というものは求めざるを得ないものだと考えています。言い方は色々ありますから、どういう表現がいちばんぴったりするかは分かりませんけれども、私自身は今このような完全な平等というものを言葉でもってそれを受けとめてみたいと思っています。まあ、どうぞ皆さん、それぞれにいろんなものを読む中で、なるほどそうだというものをつかまえて、自分の人生というものを大きく展開させていただきたいと思います。

☆引率教員 吉元助教授（同）

ちょっと付け加えたいのですが……ちょっと皆さんね、今大変なところに座っているんですよ。お分かりかと思いますが、菩提樹は今三桐先生がおっしゃったように何代か後のものなんですが、釈尊が悟りを開いた場所に立っておったその菩提樹の位置に我々はいるわけなんです。今日はこれから尼連禅河の方に行くんですが、釈尊は、そこから歩いて来られて、そしてこの菩提樹を背にして、東に向かって、瞑想をしてこの場所に座られて悟りを開かれた。こちらが東です。東というのは希望を表す方向ですね。その悟りを開いたことを記念して、アショーカ王が、この金剛宝座を造らせたのです。だからこれは紀元前3世紀のものなんですね。地理的に言うと、この菩提樹を背にして、東に向いて悟りを開かれた、その場所に今座っている訳なんですから、皆さんにとってこれは大変な感動だと思うんです。帰る時に一遍この金剛宝座に手を触れて、お参りをしてね。日本の中でここまで来られる人はなかなかいないんです。うらやましく思われると思うんですけど、そういう感激の場所に私たちはいるので、そういうことをぜひ胸に秘めて帰って下さい。

☆引率教員 藤原特別研修員（第2回、祇園精舎のアーナンダ菩提樹下にて）

今日で仏跡の参拝も最後になります。僕はうまくは言えないですけれど、今

度でここに来るのは2回目なんです。前に来たのは9年前で、丁度皆さんと同じくらいの2回生の頃にここに来ました。その時は20人位のメンバーで旅をしていたのですけれど、初めて来た人もいっぱいいまして、今回もそうでしょうけれど、いろんな学科の学生、いろんな回生の学生がここにいて、その中の気のあった者同志は話ができるけれども、その他の人とはなかなかできない、という状態でした。今回もそうだったと思います。それがだんだん仏跡を参拝していくうちに、みんなでお釈迦様のいろんな足跡を巡っているうちに、なんとなく自然に回生とか学科とか超えて話ができるようになってきて、そういうことがたいへんうれしいなという感じがします。

今からニューデリーの方や、アグラの方へ行ったりして、タージマハルとかアグラ城とかそういうところを見学に行きます。そういうところは確かに素晴らしいところですけれども、そういうところばかりを回っていたのでは味わえない深みというのか、観光旅行ではなくて、仏跡の研修というところの深みというのがここにあるなという感じがします。

先ほど先生からもお話がありましたように、ここで阿難というお釈迦様の弟子が、お釈迦様の言葉を私がこのように聞きましたという形で説かれたのが『阿弥陀経』というお経です。思いますと、僕は今大学で初代の学長の清沢満之という人の勉強をしています。清沢満之という人がどうして仏教の教えに触れたかというと、『歎異抄』という書物によって触れました。その『歎異抄』という書物は親鸞という人の語った言葉を私はこのように聞きましたとといことで親鸞の弟子の唯円という人が書き残した書物です。それに触れて、感動した清沢満之はそういう大学を作りたいという願いを持って創ったのが大谷大学で、そこで学んでいる学生が今ここにいる僕たち、先生はじめみんなです。その親鸞は何に触れたかというと、お釈迦様の説かれた説法ですね、それに感動して、私はこのように聞きましたというようにお釈迦様の言葉を伝えた阿難、このことに触れて親鸞は感動したのです。

だから僕らは今の日本にいて、物質の豊かな時代にいますし、お釈迦様は紀元前の人ですから、こうやって仏跡をずっと回っていても、あるのは煉瓦の塊が残っているだけで、タージマハルやアグラ城とは違って仏跡を回っていると言っても後で撮った写真をトランプのように切ってしまったら、何処が何処だかわからなくなってしまいそうな、こんな煉瓦の塊があるだけなんですけども、そこにただ煉瓦の塊ではなくて、そこに生きた釈尊の教えというか、そこに釈尊の教えを聴いて育ったもの、その具体的な姿が浮かんで来て、僕たちもまたたまたまいろんな縁で、たまたまお寺の息子に生まれたというだけの人もいるだろうし、ここにしか入れなかったという人もいるだろうし、いろんな縁で大谷大学に入ってきて、たまたまこの仏跡の研修旅行に参加してここに来たとい

うことにおいて、お釈迦様とは全然違う時代、違う国の人間である我われですけれども、お釈迦様がそこで説かれた法、人間の真理といいますか、何処において人間が人間であるということを確認できるかという一点、その一点に感動した歴史のある大学に集まった、そのことを縁としてここにお釈迦様の跡を訪ねて来ることができた。そのことがたいへんうれしいと言うか、感動しています。別に真宗学とか、仏教学とか特別な学問ではないと思いますよ。他の学科でも何でも大谷大学という名前が示すところに集まったということは、何かこう感動ですね、人間が人間であるということを証明した歴史に触れる感動に、その流れの中に自分達もいるんだということに触れればそれが真宗学であり、仏教学であるとそういうふうに僕は思います。だから皆何となく一緒に手を合わせてここで勤行をしていた。別に仏教の専門家じゃない人もいっぱいいますけれども、気持ちが一つになりつつあると言うか、何か感動するものに触れつつあるのです。普段授業なんか全然聞いていなくても、ここに来ればこうやって手を合わせて一つの場所に集まっているというそういうことが、本当はそのことが一番大事なんじゃないかな。ただ感動するということが、唯ひとつ感動するものに触れるということが仏教の大切な意味なんじゃないかな。お釈迦さんと僕たちのつながりじゃないかなという感じがあって感動しています。

このように教員たちも、大学の教室とは違った仏跡に立ち、臨場感あふれる感話をしていることがおわかりいただけると思う。

5　インドの大学生との交歓会

今回のインド研修旅行は、いろんな意味での人々の出会いの場であった。その中でも、特に学生諸君に強烈に印象に残った出会いは、インドのネルー大学の学生たちとの出会いであろう。それは、第1・2回の研修では、ホテルにおいて開催された交歓会においてである。第1回研修では、研修旅行及びこの交歓会の意図について、一班の団長小川教授は8月30日夜、次のような交歓会の開会の挨拶されたので、その筆録を掲載しておこう。

みなさんは、大谷大学でいろんな学問をしていますけれども、今回はインドという国を訪れました。私たち教員の方は、何回かこの国を訪れていますが、学生諸君はほとんど最初です。そして、いろんな思いを持ったのではないかと思います。

難しい話になると思いますけれども、日本という国は、近代化の先端を歩み、科学主義、合理主義の中で経済的繁栄を遂げてきました。その基本にあるところは、人を差別し、比べる心です。人より上にたてば、下の人を蔑み、下にた

てば、上の人を羨むという比べる心、サンスクリットでは、vikalpa と申しますけれども、そういう人と比べる心で経済的成長を遂げてきました。しかし、それで本当の人間の幸せがつかめたでしょうか。大谷大学の学生諸君は、短い間ですけれども、インドに来て、もう一度人間にとって本当の幸せとは何かということを、漠然としてはいるけれども、考えざるを得ないカルチャー・ショックを受けたのではないかと思います。

はっきり申し上げて、カルカッタに入り、パトナを通って、それからブダガヤ、サールナート、ベナレス、そして、昨日はアグラ、今日はデリーと、こういう行程の中で、日本人の感覚として、まず最初に、インドには貧しい人がたくさんいるということで、大変なショックを受けたことでしょう。そのほか、経済的繁栄の目でみたときに、中には、貧しいインドに生まれなくて、日本に生まれて良かったと思った人もいるでしょう。そして優越感を持った人もあったのではないかと思います。しかし、優越感は、所詮比べる心でしかありません。比べる心では、決して人間の本当の幸せはつかめない、そういうことを多分どこかで感じているのではないかと信じています。そういうことを感じることのできるセンスを持っているのが大谷大学の学生諸君ではないかと思います。

人間がそれぞれの国の文化の中で精いっぱい生きていくということが、そして、それぞれの違った文化を精いっぱい育てていくということがより大事なことでありまして、世界中が一つの同じ文化になってしまったら、固有の人間らしさが失われるだろうと思います。日本には、日本固有の文化があり、インドには、日本の倍以上の古い古い歴史を持った素晴らしい文化があります。それを単に経済的な面だけで、あるいは科学的な発展だけで、人間の幸せを決め込んでしまっている現在の状態は非常に特殊な状態であると思います。特に日本などにおいては、自然破壊であるとか、環境汚染であるとか、公害であるとか、人間が作り出したいろんな事柄によって人間が苦しんでいるという状況が現に生まれつつあります。

そういう人間が人間自身を滅ぼしてしまいかねない現在のあり方に、私たちはストップをかけなければならないと思います。そのためには、それぞれの固有の文化を大事にして、そして精いっぱいその文化の中でお互いに生き合っていくところに、何かしら人間として手を取り合っていける世界があるのではないかと思います。

特に、大谷大学の学生諸君は、今まで目で見てきた事柄と合わせて、今日は直接インドの若い学生諸君と言葉を交わす中で、お互いの心に感じたことを、問題点を、お互いに語り合っていただきたいと思います。

この後、本学のＯＢで、団長小川教授の同級生であるインド大使館員（日本

文化センター所長）菊池法純氏の「インドのモンスーンについて」という永年のインド・ネパール生活の経験に基づいた感銘深い講演があり、引き続き、同ホテルの中華レストランにて、交歓会が持たれた。

今まで見てきた貧しいインドの人たちとはうって変わって、素晴らしいスーツやサリーを身に纏い、知的な目を輝かせて、日本語を上手に操るインドの学生たちに、本学学生諸君はまず目をみはり、ホテルへの到着が遅延したため、シャワーはおろか、着替さえしてきていない我が姿に途方にくれていた。

しかし、次第にお互いの話は弾み、時間の経つのも忘れて、深夜の11時頃のお開きの挨拶もかき消され、ついに12時頃まで交歓会は続いた。２班の方でも同様であったという。下痢をして弱々しい顔をしていた学生たちも生き生きと目を輝かせてインドの学生と話し合っており、我々教員たちは、若い学生諸君の友情のエネルギーに今更ながら驚嘆したことである。

学生諸君は、相互に住所を交わし、今も文通をしている者もいるという。先日、ある女子学生が、インドの友人から手紙がきましたと、嬉しそうに報告してくれて、この試みが本当に良かったと実感した。

２班の方では、インドの大学の教授との交流も持たれた。団長長崎教授のナーランダー留学時代の学友で、現マガダ大学仏教学科主任教授アルツァ・トゥルク氏に成道の地ブッダガヤーでスピーチをしていただいたとき、何人かの学生の目から感激の涙が流れていたという。また、インド学生との交歓会には、ネルー大学のモトゥワニ教授が感慨深いスピーチをしてくださったとのことである（長崎法潤「ブッダの声を聞く旅」大谷大学広報３―３参照）。

このインドの大学生との懇談会の成果及び反省点については、第二回研修後にアンケートをとったので、その集計全文をそのまま紹介しておこう。

〈インド人大学生との交歓懇談会について〉

１　インドの大学生と話ができたか。

(1)充分できた……19人

・すごく楽しかった。

・インド人の学生に手紙を書くことになり、いずれ日本にきたら京都を案内すると言った。

・インド人の学生と日本の学生の普段の生活状況 etc。言葉の違いなど。

・インドの街での疑問などを質問できた。インドの学生は十分にその疑問に答えてくれた。

・どんな日本食を食べたことがあるか。ビンディの意味とコーディネート方法。インドの大学の仕組み。
・のりがよかったのと、けっこう幅広く話題があった。内容は、結婚、カースト制度、家族、遊びなどだった。
・隣に座ったし、すぐ仲良くなれた。
・哲学的なことや、貿易の話。
・インドと日本の宗教感の違いについて。
・将来の夢、日常生活、趣味など、一時間延長してもあっという間だった。
・B・Fのことや、学校のこと。
・大変日本語の勉強が好きな人びとであると感心した。日本語だけでなく、日本の文化、歴史、都市など私よりも知っていた。彼らの夢は、日本へ来ることだという人もいた。見習う点がとても多かった。
・インドにきて思った日常生活や宗教に対する疑問などを聞いた。
・学校のこと、日本に対する考え。
・学校生活の違いなど。
・趣味、興味の一致。
・日本にきた人がいて、日本の印象や、星座、学校、ファッションなどについて。

(2)できた……59人

・大学で学ぶ内容や、日常生活について。
・インド人も日本人も学生はまったく一緒だと思った。一緒に歌を歌って、最後にそれぞれの国の歌を教え合った。
・時間を気にしながらの交歓会だったし、慌ただしく別れたのが残念。
・インド人の伝統や、現代の社会、結婚についてなど。充分にできたとは言えなかったのは、時間がもう少しあればと思ったから。
・インド人学生は、カーストでも上の方の人でした。話を聞いて、やはりカーストの差は、大きいと感じました。
・できたといえばいえなくはないが、もっと時間があればまだまだ話せた。
・インドと日本の考え方の違いについて。
・時間が短かったので充分話せなかったが、映画、音楽、学校の話などだった。
・インド又は日本の印象について。将来の夢について。
・インドの大学生は話しやすく、生活についてや、ヒンディー語を少しならった。
・食事の時に色々教えてもらってケーキをとる時に一緒にいっぱいとって喜んでいた。男の人と話しもして、盛り上がった。
・かなり日本語を理解することができていておもしろかった。

・大学のこと、映画の話、恋愛のことなど。
・京都の街、留学について。
・日本に留学されていた時のことや昔のインドと今のインドの変化など。
・日本語の学習の仕方など。
・もう少し時間がほしかった。
・普段の生活、学校、友達、小説、スポーツなど。
・標準話と方言でどのように違うかとか、趣味など。
・日常生活についての話。
・インドや日本の風俗について。学生生活について。
・アクセサリーについて。
・ごく当たり前の話。インド人だから、日本人だから、と言っても、年も近いので共通点も多い。
・インド人の学生が、思ったより日本語を話したから。
・やはり最初は話しにくいのでぎこちなかったが、学校での話や、お互い漢字のテストをしあったり、簡単なゲームをしたり、最後は映画の話などで盛り上がった。もっと多くのことを聞いてみたかった。
・はじめは緊張したが、趣味やインドの習慣などを話した。
・結構固いはなしだったので、がっくり。もっと色々なことを聞きたかった。
・歌を歌い、歌を交換した。
・仏教のこと、ヒンズー教のこと、インド人はどんな勉強をしているかなど。
・おしゃべり好きな人だった。
・最初はインドのこと、学校のことなどを聞き、あとは他愛もない話をした。
・生活について。
・緊張して思うようには話せなかった。
・とても親しみやすい人で、インドの社会、文化のこと、日本のこと、お互いの大学のことなどを話した。もっとゆっくりできればよかった。
・時間が短く、インド人がテーブルにひとりだけだった。彼は社会人だったので話題が変わっていた。
・インドの大学生はとてもよく勉強をしている。自分の国のことも、日本のことも、よく知っている。私は、もっと日本から知っていくべきだ、勉強不足だと知りました。
・充分話すのは、3時間では無理だ。男と女についての話がおもしろかった。インドでは、男尊女卑がまだまだ強いようだ。
・インドの学生のことをたくさん聞くことができた。
・文化、教育、習慣の違いから始まり、……というところで時間になってしまい、残念である。

・何をどう話していいか、戸惑った。
・はっきりいって始まる前は苦痛だった。しかし、インドの方が日本語が上手でとても楽しく、時間が足りないくらいだった。内容は、やはり大学のことが多かった。
・日本文化との対比、学生生活、住所について。
・大変楽しかったが時間が短すぎた。
・インド人は何を大切に生きているのか。
・学校生活、インドの生活スタイル。

(3)できなかった……15人

・年令のギャップが大きすぎる。もっと話の合う友達を求む。
・時間が短すぎる。たくさん話をしたのだが。
・ぼくが英語がしゃべれなく、相手は日本語があまりしゃべれなかった。
・インドの生活環境や日本の生活との違いについて。
・時間が少ない。
・はじめの時間が遅れてしまったのと、少し戸惑って何から話せばいいのか、わからなかった。
・もっともっと時間がほしかった。
・盛り上がってきたところで時間切れだった。
・いざとなったら、なかなか質問がでてこなかった。
・インドの文化、日本の文化、お互いの私生活についてなど。
・インドの学生の方がおとなしくて、話がきれきれになってしまった。お互い打ち解けるには時間が足りなかった。
・相手が年上だったので、何を聞こうか迷ってしまった。でも最後の方には少し打ち解けてきた。
・何を話していいかわからなかった。
・話が盛り上がらなかった。
・写真を撮っていた。

2　交歓懇談会で印象に残ったことがあれば話してください。

・同じ年のインドの学生さんが日本語ペラペラで、よく勉強しているなあと思った。
・ケーキがうれしかった。
・一緒に歌えてよかった。
・日本の歌を歌ってくれたこと。
・インドの人が、最近の日本では結婚しない女性が多いことを知っていた。
・大変勉強になった。懇談会の時間をもっととってほしかった。
・気さくな人でよかった。

・日本語ができるので驚いたが、その他、英語など語学面でも自己主張もはっきりしていてびっくりした。
・インド人の歌が上手だった。
・女性はあまり着飾っていないのに派手に見えた。男はすごく地味だった。
・時間が短くて慌ただしく、サリーを着替える時間も大変だった。
・日本の歌がうまい。
・インドの学生が、こちらが驚くほど日本語が話せること。
・どこの国も女の人はケーキが好きということ。
・インドの人は非常に親の言うことを聞くのだなあと思ったし、常に現実的なものの考え方をするのだとも思った。でも、ものを現実的に考えすぎて、少し寂しい気がした。
・ネルー大学の方々の日本語のうまさにびっくりした。
・学びに対する熱心さが伝わってきた。
・やはり自国について、外国からどのような印象か気にしていた。
・相手の方が真剣に勉強していた。
・インドの方は日本にとても興味を持っていたが、実際日本に留学されたときどう思うんだろうと考えると、今の日本の実態を考えると少し恐かった。
・慣れてきた頃に時間がおわった。
・住所を紙に書き、互いに交換した。
・インドの学生は自ら進んで勉強している。
・インドの学生はみな賢そうだった。話しやすかった。
・インド人と日本人が数人ずつ歓談して、インド人が日本の歌を歌ってくれたときはとても感激してしまった。言語も人種も越えて、人間みんな一緒なんだなあと初めて心から思った。
・金持ちの学生より、普通の人がいい。
・とても頭のいい人で、また、勉強熱心なので感心した。
・ビンディーをつけてもらった。
・ペンフレンドになりたいといわれたこと。日本の女の子と同じことを考えていたこと。
・日本語を学ぶ男子学生が少ない。
・インドも日本も、よく聞けば似たような考え方とかが多くて、少しびっくりした。学生の考えることはどこでも同じだなあと思った。
・終わったときほっとした。
・インドの人は、目がとても大きかった。
・わたしたちの4年間と彼らの4～5年間というのは、大きく違うように感じた。もっと私たちも勉強しなくてはいけないのかと感じた。日本に留学する学

生が多いことに驚いた。
・インドの人がとても大人っぽく見えた。
・インドの学生はとても勉強している。
・バイキング式に立ち歩くときに、あまり話ができなかったので、中華のようなスタイルだと話す時間が多かったのではないかと思った。
・みんなとても積極的で勉強熱心。
・鼻のピアスを披露してもらった。
・インドの学生さんが日本に留学したとき、90分授業が耐えられなかった話。
・日本語が立派すぎて頭が上がりません。
・インドでは男同士仲が良いという話で盛り上がった。
・あまりにも日本語が上手で驚いた。どうして日本語を勉強しているのか聞いたら、日本や日本人が好きでいっぱい話をしたいからと答えられて感動した。日本人は英語ができない人が多いから私が日本語を勉強するのだといわれて、恥ずかしかった。
・インドの女性はすごくきれいだった。
・インドの学生さんはみんな日本が好きと言ってくれてうれしかった。
・ホテルにこられた学生はよく勉強するなあと思った。
・彼女たちが短期間のうちに、かなりの日本語の能力を養っていること。
・もっと多くの学生と会いたかった。
・同じ年令くらいなのに自分よりはるかにしっかりしているので、自分が恥ずかしかった。日本語がうまいのに驚いた。
・先輩であろうと後輩であろうと意見がぶつかればとことん議論していた。こういうことがしょっちゅうだそうで羨ましかった。
・すごく日本語が上手。日本の歌とかもとても上手でびっくり。
・語学習得のスピードの速さに驚いた。
・日本人は働きすぎ、ＮＯと言わない、閉鎖的だそうです。
・インド学生がおとなしくて困った。
・外交辞令はしんどい。もっと気楽にいきたかった。
・日本語が大変うまい、うまいとは聞いていたが、あそこまでうまいとは思っていなかった。驚き。
・インドの女性の、結婚するまでの心がけとか教えてもらったのがおもしろかった。
・来ていた人はいいところのぼっちゃん、おじょうちゃんばかりだった。
・まじめ。我々とは違う。
・インドの学生さんは本当に賢く日本のことをよく知っていた。

ここで、学生たちの感想の内容を整理分類せずすべて列挙したのは、これを

読むことによって、彼らの交歓の全容が彷彿されると思ったからである。短い日程の中での、短時間の出会いではあったが、それなりの成果もあったようである。また、その反省点も考慮して、先方の大学への訪問、あるいは、大学生宅へのホームステイ、さらには、インドの大学への短期留学などの実現も志向しなければならないであろう。

6　学生・師弟の出会い

大谷大学の学生たち相互の出会いもまた、新鮮な意味をもたらしたようである。第１回研修での１班では、一日滞在の延びたデリーの空港ホテルの一室で、有志による反省会がもたれた。その会の主催者である金森勝広君（当時文学部四回生）の挨拶の一部の筆録を記しておこう。

> 皆様、お疲れさまでした。あと１日になりましたけれども、なんとかラッキーに、僕にとってもラッキーだったんですけれど、１日延びて、宴会もできて（笑い）、良かったなあと思います。それで、やはり、大谷大学にいても、本来なら知り合わなかったと思うんですけれども、こういうきっかけで知り合えて、１班・２班に別れたけれども、前半の１班で知り合えて、仲良く楽しくできたのは、素晴らしい出会いだと思います。日本に行ってからも寂しいつき合いでなく、楽しいつき合いをしたいと思いますので、機会を持って集まりたいと思います。（中略）是非とも日本に帰っても会いましょう。それから、学園祭で、リムカを売りましょう（笑い）。そのときには是非参加をしてください。ありがとうございます（拍手）。

また、第２回研修の第２班では、ゆっくりできたクシナガラとバルランプールでのホテルにおいて、他の客が全くおらず、ほとんど大谷大学貸し切りの状態であったので、ホテルの中庭で、夕食後、キャンプファイアーが行われた。満点の星空の下、蛍の乱舞を楽しみながらの語らいは、インドの思い出をさらに深いものにしたようである。

このような出会いは、我々大谷大学の教員たちにとっても、実に有意義なものであった。この頃、学内を歩いていると、学生から親しげに挨拶されることが多くなった。一緒にインドに行った学生たちである。大勢の学生であったので、なかなか全参加者の名前まで覚えられないが、少なくとも10日間は寝食をともにし、同じ釜の飯を食った間柄である。しかも、同じ仏跡に立ち、何回か話を交わしたはずの学生である。中には、インドのホテルで、深夜２時頃まで

涙ながらに友人関係や恋愛問題について語ってくれた学生。熟睡中の我々をたたき起こして、買ったばかりのサリーを着て見せにきてくれた女子学生。

インドは、我々にふだん大谷大学では出会えない大谷大学生と深いつながりを持たせてくれたように思う。

7　雨期のインド

筆者が今までインドを訪問したのは、いつも２月から３月上旬にかけての大地の赤茶けたからからに乾いた冬の乾期であった。ところが、今回の研修旅行は雨期の末期に行われた。その生き生きとした緑の大地は、筆者にとってまったく新しい体験であった。その感激は、筆者のようなものにはいくら筆を労しても表現できそうにないので、若い感受性の豊かな女子学生の文章を少し引用してみよう。

> ９月初めのインドは雨期もおわりに近づく緑の大陸であった。雨期でない季節、つまり10月から年明けて５月までの８カ月間はからからの乾燥大地であるという。
>
> けれど、私の見たインドは、至るところしっとりした、いや正確にはじっとりとねばりつくような湿潤の世界であった。草や稲やトウモロコシが茂り、もう水浸しの洪水のようになっている水田さえあちこちにあり、牛が顔だけ出して泥水につかっていた。（中略）
>
> けれど、私は、ナーランダ仏教大学遺跡のてっぺんから周りを見渡した時、ええ、世界はほんとに美しいですね、と素直に思うことができた。インドで初めて高い場所から水田と森と草原と集落の点在する大地を眺めた時である。また、霊鷲山の頂上から樹木の生い茂るなだらかな高原を見晴らしたときもそう思った（船戸浩子「インド雑感」大谷大学広報３－３）。

本当に我々の体験したインドの雨期は、日本の梅雨どころではない。100％に近い湿度で、まさにべっとりという感じである。滝のようなスコールはベンツ製の冷房バスにも窓の隙間や換気口から容赦なく入り込み、床は水浸しである。国道沿いの水田も洪水で、湖のようになっている。そのなかに電柱があり、水の中を自転車が走っている。ベナレスの空港で１班の我々は、このすさまじいスコールに見舞われた。豪雨と雷鳴のため、飛行機の出発は２時間も遅れた上、途中寄港予定のカジュラホー空港をとばして、そのままデリーに直行した。

また、ベナレスのガンジス河のガートの様子は、のどかな乾期とはまったく

一変していた。水は10メートルも増水して、沐浴する余地もないほどであった。舟の通る水の中に街灯が立って、手に取れるくらいの高さに電灯がついていた。激しい水流を遡るため、河岸から縄で舟を引く人がいる。乾期の女性のような静かなガンジス河とこの恐ろしい濁流の対比、インドの人のこの河に抱く宗教感情というものの一端を垣間みたような気がした。

パトナのガンジス河も同様であった。河の水は国道のそばまで迫っていた。ブッダ最後の旅の様を伝える『Mahāparinibbānasuttanta』では、ブッダがこのガンジス河を渡られるとき、「そのとき、ガンジス河は水が満ちていて、烏が飲めるほど岸までいっぱいであった」(D. II. p. 89)と説かれているが、まさにこのようであったのであろうと思うと感慨ひとしおであった。

先に触れたインド大使館の菊池氏も、交歓会での講演において、「インドにおいては、このモンスーン期というのが最も大切な重要な時期であります」ということを最初に述べられた。まさに乾ききった大地を生き返らせ、そして、生産と豊饒の恵みをもたらすのがこのモンスーンなのである。『スッタニパータ』にある次の一節は、まさにこのモンスーンを待ち望む農夫の心情であろう。

> 牛飼いダニヤが言った、「蚊も虻も存せず、牛どもは沼地に茂った草を食んで歩み、雨が降ってきても、彼らは堪え忍ぶであろう。だから、神よ、もし雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」(Sn. 20)

8 成果と反省そして今後への展望

以上に述べたように、今回のインド仏跡研修は、様々な出会いをもたらし、学生たちだけでなく、我々教員たちにも多くの感慨を残してくれた。学生諸君もデリーの空港で、日本に帰りたくないと駄々をこねていたし、その後帰国してからも、インドの話をすると目を輝かせている。そして、大学広報などにも素晴らしい感想文を寄せてくれた。

第1回、第2回とも、帰国後しばらくして、本学学内食堂において、第1・2班合同による盛大な反省会が催され、様々な思い出話に花を咲かせたことである。また、先にふれた、デリーでの反省会で、金森君が提案していたように、それぞれの年度の大谷大学学園祭では、インド研修旅行に行った者たち全員のコンセンサスが得られて、インド・カレーとインドの産物のバザーとインド写真展を行い成功裏に終わったことも記しておこう。

なお、第１回研修では本学学生部により、また、第２回では真宗総合研究所の我々の共同研究班により、インド研修旅行参加者に対する帰国後のアンケート調査を実施した。回収率は第１回は44％に過ぎなかったが、第２回では、帰国途中の機上で調査を行ったため100％近い回収率があった。この調査は、今後の研修旅行計画に貴重な資料となりそうなので、その集計を掲載しておこう。

その結果を集計してみると、研修内容、場所とも「よかった」と答えたものが２回ともほぼ100％になっており、また、インドの大学生との交歓会についても「よかった」と答えたものがどちらも95％近い数字が出ている。ただ、日程については、どちらもかなりの強行軍であったためか、「よくなかった」というのが第１回は20％、第２回は37％という数字になっているので、今後の計画の反省点となっている。

参加の動機については２回とも各自自由に書かせたが、いずれも、「仏教を学びたい」「インドへの興味」「仏陀の足跡を辿りたい」など、直接仏教に関わる回答が多かった。なかでも「タージマハルを見たくて」というのがかなりあったが、これは女子学生の参加が男子学生より多かったことによるのであろうか。

第１回調査では、最後に自由に感想を書かせ、また、第２回では、個々の事項を設定して、それに２～３行ずつコメントを求めた上、さらに最後の自由な感想文を書いてもらった。これらコメントと感想文はすでに本稿でいくつか引用したが、ことにこの研修の成果がよく現れていると思われるものを以下、まとめて紹介しておこう。いずれも、この研修旅行が大谷大学学生として、また、インドや仏教への理解のため、あるいは、それぞれの学生の人間性向上のため素晴らしい効果のあったことが分かる。

アンケート調査結果の抜粋

	第１回	第２回
１．参加動機（多かった回答）		
	仏教を学びたい	インドに興味
	友人に誘われて	ただ行きたかった
	インドに興味	仏教を学ぶものとして
	ポスターを見て	ブッダの悟ったところを見たい
	異文化にふれるため	友人に勧められ
	友人を作るため	タージマハルを見たくて

2．研修内容

1)たいへんよかった	60.8	46.8
2)よかった	49.2	52.1
3)よくなかった	0	1.1

3．研修場所

1)たいへんよかった	61.5	47.9
2)よかった	38.5	51.0
3)よくなかった	0	1.1
1)これで充分	36.0	63.5
2)他の仏跡も	64.0	36.5

4．研修日程

1)たいへんよかった	21.1	13.5
2)よかった	57.7	48.9
3)よくなかった	21.2	37.6

5．交歓会

1)たいへんよかった	51.9	55.2
2)よかった	40.4	40.6
3)よくなかった	7.7	4.2

6．今後への継続

1)大賛成	96.1	89.7
2)積極的でない	3.9	6.3
3)反対	0	0
3)答えない	0	4.0

7．他に研修希望の国（上位4国）

中国、タイ、	中国、エジプト、
ネパール、チベット	チベット、アメリカ

3．感想

1） 仏教科というのがものすごく恥ずかしくて、人にも言えませんでした。（中略）今回のインド研修に参加するのも、ただ何となくみんなが行くから行こうかという気持ちでいた。終わってみると、こんな気持ちでいた自分がものすごく恥ずかしい。ガイドさんの話を聞いているうちに考え方がものすごく変わった。始めはレンガのへんな建物がいっぱいで、皆同じだと思っていたけど、2世紀頃のものとかがそのままの形で残っているのには何ともいえないものがこみあげてきた。

2） 私は昨年と今年の2回目の参加でしたが、インドが私に与えてくれるものは私の期待をやはり裏切らないものだった。昨年参加してインドの魅力にとりつかれたと同時に、私は3回生の夏にして、やっと自分が谷大生でよかったという誇りをこの旅

を終えた後感じた。私が専攻する史学を通じてではなく、仏陀を通して、始めて大谷大学を知り、そこで学ぶ自分が幸せであると感じた旅だった。

3）インド人の人懐っこさ、お金お金と、1才の子が手を差し出す様、地方によって日本人に対する態度の違い、レンガの赤と草木の緑の美しさ、熱心に礼拝する姿、さとりをひらかれたその土地。行く先々、見るもの全部が、新鮮で印象深かった。動機は単に行きたかったから。でもどうせ行くなら仏跡はさておき、人間を見てやろうと思った。仏跡ではほとんど何も感じなかったけど、人や、インドの広さ、物の考え方等など自分なりに考えることがたくさんあった。今のところは良かっただけだが、帰って落ち着いたら又じっくり考えてみようと思います。今年は卒論、勉強不足が情けないです。やっぱりこの旅行のいいところを自分のプラスにしていきたい。この旅行のことなら［原稿］50枚は楽勝なのに［卒論は］頭が痛いです。

4）人間として私はどうするべきなのかなんて難しいことはわからなかったけど、生きるということの原点を見たような気がする。日本の情報社会に生きている私は、命という大事なことを考えなさすぎたのかもしれない。インドにきたことが私の人生に大きな影響を与えたけれど、きっといい方向にむかうような気がした。ブッダに感じたことは、高校や大学でならってきた紙や知識の勉強とは違って、2千年以上も大昔のことなのに、そのゆかりの地に立って同じ空気を吸うことにより、大昔の風を思った。これほどまでに多くの人に衝撃を与えたブッダとは、本当はどんな人だったのか、見てみたい気がした。インド旅行に来ることができたことを心より感謝いたします。ありがとうございました。

5）あんなに高級なホテルに泊まり、高級なバスに乗っていれば「バクシーシ」と言っていた子供の気持ちはわからないし、あんなに安っぽいホテルに泊まり、バスに乗っていればマハラジャの考えは理解できない。インドの人は生態系に忠実に生きていると思った。日本のような妙な平等意識はなく、より力強く生きるもの、才能あるもの（生まれ階級も含む）が生き残る社会であった。僕は日本人と感じた。（僕の方がバクシーシと叫んでいる子供よりも豊かな生活をしているので申し訳ないと思うのではなく、日本人としての pride のようなものが生まれた。）

6）今回も現在の自分に自信と誇りをもたせてくれた仏陀に会いに、そして、自然に逆らわず人間も動物もそして近代的文化もともにごちゃまぜに共生しているインドの人々の人間本来の姿を見たさに足を運んでしまった。インドは前回と変わらずパワフルでバイタリティーあふれた人でうめつくされ、子供たちのくったくのない笑顔と澄んだ瞳が我々を迎えてくれた。これからも彼らの生活が多少なりとも我々に近づきつつあっても、今の彼らの心を失わないでほしいし、また私たち先進国の人間がその心を犯すようなことはしたくないと思う。最後に、私は本年度で卒業しこの研修で最後となるが、一人でも多くの谷大生が、我々がインドから与えてもらった何かをつかみにこの研修に参加してもらいたいと思う。

7） インドは来るたびに好きになるだろうし、１回や２回来たぐらいではきっと理解できないことも多くあると思います。インドの人は貧しくても日本の人々よりも幸せそうで、ただ生きて生活しているだけでは避難されがちな日本人とは違って、生きて生活するということ自体に生きがいを感じ、喜びを感じているように思えます。また、彼らは弱くてカラを作ってしまう日本人とは違ってとても強くてしたたかでタフです。是非もう一度インドに来たいし、インドの人ともっといろいろと話せるようになりたいです。

8） 仏教的なことはいまさら書かなくても各個人が心の中でずっと持ち続ければいいと思うので省略します。インドの大地に立ち、人間、動物、自然が共存している。ガンジス川では沐浴する人の前を死体が流れ、自動車が走っている道は動物たちの道である。バザールには人々があふれ行き交う。私の心の中に強烈な印象として残っている。聖なる大地の Power であろうか。今、日本人が忘れようとしている何かを、インドという国は教えてくれた。いや、改めて人間とは、という問いを持ち掛けてくれる国ではないかと思う。

以上のように、おそらく、彼らにとって、これから受けるであろう本学における仏教学や真宗学の講義が今までとは違った新鮮なものとなるであろう。しかも、本学にいることが、そのままブッダの国インドと直結していることに気がつくはずである。このような感動を一人でも多くの本学の構成員が共有することができるよう、新たな展望を期待するものである。

今回の研修旅行では、途中、下痢、風邪、喘息などの病人が発生し、さらに、第１回では、帰国後、７人の赤痢保菌者が発見されるなど、思わぬ副産物を生みだした。これには、やはり、雨期という時期が問題であるのか。また、第１班では50人以上、第２班では70人以上という人数になり、現地で、２～３台のバスを連ねて移動し、トイレ・ストップなどにも思わぬ時間を食い、小回りの効かない不便を何度も味わった。その意味で、人数とコースの問題があるのか、反省の材料になった。そこで、第２回では、研修期間を12日間に延ばし、人数も各班で50人以内に制限した。幸い第２回は上記のようなことは解消された。

ただ、第１回の研修旅行は、準備期間も少なく、そのため、全学的なコンセンサスも不十分なまま、様々な問題点を残したことも事実である。大学の全学生を対象にする以上、当然この旅行は大学の主催になるべきであったが、その過渡期的措置として、第１・２回とも、第一研究室と短期仏教科研究室の共同企画で主催せざるを得なかったことであろう。

そこで、大学の事務当局は、両班の研修旅行に当たって、事務職員を添乗させたり、夏休み中であるにも関わらず、連絡本部を設置して、昼夜を問わず待機していただいた。本学各研究室が全部こういう研修旅行を行うようになったらどういうことになるのかという危惧を現場の職員から聞いたが、それもあながちに思い過ごしとは言えないであろう。

なお、本共同研究終了後の平成５年度より、このインド仏跡研修は、大谷大学主催となることが決定し、大学総体の企画として、平成５年９月に、２班に分かれて行われることになり、また、平成７年度からは、この研修が大谷大学及び大谷大学短期大学部の授業単位化されたうえ、さらに、京都大学センターの単位互換授業として全京都の大学にも解放されることになったことを記して、本稿作成に協力いただいた関係各位に謝意を表しつつ、本章の結びとしたい。

（本章は、本共同研究の成果の中間報告として『仏教学セミナー』54号に掲載した、吉元信行「インド研修・出会いの風光―大谷大学第一研究室・短期仏教科研究室企画第一回大谷大学インド仏跡研修旅行報告―」に第２回研修の成果を加え、共同研究研究員一同が加筆修正したものである。なお、インドの地名については、できるだけ表記を統一するよう努めたが、案内文や学生のアンケートの中まで統一できなかったところがある。学生の感想文等は原則として匿名としたが、大学の出版物や文集等ですでに公表されたものについては、出典を明記して実名とした。その中で全体との統一上、若干表現を筆者の責任で変えたところもあるので了承されたい。引用したテープ筆録の文責はすべて研究員吉元にある。）

IV. インド仏跡研修の活用方法
——感動体験を教育に生かすために——

［1］

インド仏跡研修を本学の講義等でどのように活用すべきであろうか。参加した学生が得たインド体験や仏跡についての知識は多大なものであるから、大学の教育において学生のその体験や知識を積極的に活用し、参加した学生本人に勉学の意欲を高め、参加しなかった学生にとっても勉学の刺激になるような方法が考えられるのではなかろうか。

仏跡研修の参加者は、筆者のゼミでは毎年数名いるので、ゼミの前期レポートのなかに「インド仏跡研修に参加して」という題を一つ含めている。参加した学生は、レポートを書くことによって、体験してきたインドを論じ、仏跡とブッダの生涯についての知識を深めることができる。さらにゼミの時間に、異文化に触れた体験を発表してもらっている。いきいきとした体験談を聞きながら学友たちは文献で学ぶインドとの相違に疑問を抱き、インドに対してますます興味を示すようになる。

仏教学講義3「仏教の源流」は、1回生から4回生まで聴講できる専門の講義であり、他学科の学生もたくさん出席している。前期レポートの題を3つあげ、その中のひとつに「インド仏跡研修に参加して」という題を加えてみた。受講者260名のうち20名の学生が上記の題のレポートを提出した。研修旅行のとき、あわただしいなかで書いてもらったアンケート調査とは多少異なり、レポートということから、内容を整理して書きあげている。以下それらの中からいくつかをとりあげ、仏跡研修旅行の活用方法を考えてみたい。

［2］

豊かな盛受性をもった若い学生達は、インドの大地に触れて、あるものはブッダを感じ、あるものは「何か」を感じている。

2回生A（第1回研修参加）は、次のようにレポートを書きはじめている。

☆　インドについた時、その国特有の空気が私を包んだ。違和感はさほどなかった。ブッダという共通したものがあるためなのか、感覚的に私はインドになじ

めた気がした。また、約１週間近く過ごして、朝のなんともいえない、空自体がすんでいるようなやさしい、不思議な朝、太陽がこれでもかと言わんばかりに照りつける昼、そして、昼よりも人を感じさせる夜を思うと、何故だか、ブッダがインド、この土地で悟りを開いたのもわかる気がした。私は現在のインドしか見てはいないのだけど、でもここは、人と人との感覚的な距離が近い、もしくは近すぎるような気がした。この雑多で、すべてが自由にいきいきしているというような所でゴータマ・ブッダは悟りをひらこうとしたのは、この激しい生命力とでもいうようなものが、周りや自分のなかにくっきりと見られ、それゆえに死を恐れ、時の移り変りを恐れ、出家したのではないかと思われた。

また、第１回、第２回の研修に参加した哲学科倫理学専攻の３回生Ａは、このように書き出している。

☆　私は昨年、インド仏跡研修旅行に参加した。そして、この一年なんだか余韻さめやらぬままに、また今年もインドの大地を踏んでいた。

だいたい、私は仏教学科でも真宗学科でもなく哲学科で、仏教に関する知識などほとんどなかった。正直な話、昨年訪れた時にはブッダの一生すら大雑把にしか知らなかった。仏教を学ぶ人達にとって、まさにそこにブッダを見る思いで訪れる仏跡も、そのような私にとっては、全く豚に真珠、猫に小判といった具合であった。ただ、その豚、猫（私）でさえも、何が何だかわからぬままにその地に立つ時、「何か」を感じていた。それは一体何なのか、そんなことをこの一年考え、そして昨年よりほんの少し多い知識をもって、私は再びインドを訪れた。

［３］

仏跡の研修はナーランダから始まり、王舎城では竹林精舎、牢獄跡、霊鷲山を訪ねる。霊鷲山に登るのは午後の最も暑いときであるが、汗を流して登り、頂上に立ったとき、なかなか言葉では言えない感動をおぼえる。

（ａ）

２回生Ｃはこのように記している。

☆　霊鷲山に登るのはしんどかったが、上まで登って見た景色、そして、ここで釈尊が遠い昔説法していたのだと思うと、すごく神秘的な気持ちになり、気付けば一人でボッーとしていた。時間になり山を下りなければならなかったが、すごく下山するのが心惜しかった。

２回生Ｂ：

☆　汗をかきながら、次に霊鷲山へ行く。まわりの景色をゆっくり見ながら行け

ばいいのだが、下の方を見ながらでないと進めない。牛のふんのためだ。歎仏偈で勤行する。みんなが静かになって、私の心も静かになった。まるで、時が止まったように、静けさがおとずれた。先生方の声を聞きながら、暑いことや山を登って大変つかれたことを忘れていった。

3回生A：

☆　また、岩の形が鷲の頭のように見えるという霊鷲山に登る。ハッキリ言って、昨年この登山でかなりきつかった思い出があるので、今年も登るのはイヤだなあなどと少し思っていた。しかし、実際登って、やはり登るのは苦しかったが、頂上でのあの景色を見て、あの風に吹かれて、「ああ、思い出した」と思った。日本とはちょっと感じの違う山々。細く白く見える道。そして汗だくになった体を心地よく冷やす風。そこでの『歎仏偈』による勤行。全く静かな山の上で『歎仏偈』の唱和が響き渡り風に溶けていった。昨年、私はこの光景に最も感動をおぼえたのだった。そして、今年もまた何ともいえない厳粛な気持ちがよみがえってくるのを感じた。

時が止まったような静けさ、汗だくの体を心地よく冷やす風、頂上での景色、など、霊鷲山の頂に立って感じたままを学生たちは見事に表現している。ここに一つ一つ記さないが、どの学生も霊鷲山で大きな感動をおぼえている。さらに、歎仏偈の唱和によって、学生たちの感動は宗教的感動に結びついている。

（b）

ブッダが悟りをひらいたブッダガヤーでは、どの学生も仏教発祥の地に詣でた喜びを感じている。その地に立つことによって、ある学生はブッダの悟りの内容を思い、また、ある学生は自分自身を見つめようとしている。

4回生A：

☆　四日目。ブダガヤー、5時半起床で、ベッドから体を起こすと、窓の外のまだ薄暗く朝靄がうっすらとかかる向こうに、大塔がそびえたっているのが見えた。その不思議な魅力に、しばらく呆然と眺めていた。

3回生D：

☆　ブダガヤーは重要な意味をもつ聖地です。それは、この地で仏陀は6年の苦行をし、そしてついに覚りを開かれた仏教の源だからです。仏陀が瞑想し覚りを開いた所には金剛宝座があり、その横にはあの有名な菩提樹が枝をのばしていました。その場で私達は勤行をし、先生が、「君達は今、すごい所にいるのだよ。」とおっしゃった時、初めて今自分が立っている場所の重要さを感じました。生まれて以来ずっと仏教と関わってきたはずなのに、私はその末端だけを見て育ってきたのだなと思いました。つまり現代の日本において、信仰という

よりも慣習化したお盆の行事などしか知らず、その源となる仏陀についてはほとんど知る機会がありませんでした。しかしこの旅行に参加して、仏陀が覚りを開いた菩提樹の下に、そして同時に仏教が生まれたこの場所に、まさか自分が立つことができるなんて本当に信じられないことでした。何千年も昔、皆が平等に幸せに生きるためにはどうすればよいかを考えながら弟子と共にインドのあちこちを歩き、しかし途中でスジャータの村で乳がゆを食べてしまったために弟子達に見離され、たった独りでこの菩提樹の下に座り、瞑想を続けました。そしてようやく、覚りを開き皆が平等に生きるためには欲を捨て、自我を捨てなければならないと考えたのでした。

1回生A：

☆　現在、ブッダガヤには、覚りを開いたとされる場所に、マハーボディ寺院がある。その地に座り、金を使った釈迦像を見ていると、美しい釈迦の前の私自身が、とても汚らしく、汚らしく思えた。自身をよごれたものと感じれば感じるほど、釈迦の像は、美しさを通りすぎ、崇高とよびうる何かが宿っているように思えた。突然、涙があふれ出していることに私は気付いた。そして私が生きてきた20年間の時間、その事実がとても軽く薄っぺらなものであるように思えた。

3回生E：

☆　釈尊が覚りを開いたといわれる菩提樹の下で私が菩提樹を見上げていると、突然インド人が、「この葉をあげます」と皆に配っていて、私も思わず受け取ったが、後でものすごく高い値段で売りつけられたらどうしよう？　と思ったりしたが、その人は何も言わずに立ち去って行ってしまった。しかし私はその葉をもらえたことを大変うれしく思っていて今でも大切に残している。

（c）

第1回の研修旅行では、巡拝した仏跡はナーランダ、王舎城、ブッダガヤー、サルナートであるが、第2回目にはクシナガラ、ルンビニー、祇園精舎も含まれている。初転法輪の地サルナートについてその感動を記す学生は多くはないが、2回生Aはこのように感想を綴っている。

☆　ベナレス近郊のサルナートに行き、いろいろな遺跡を見て、先生の話を聞いて、また感動してしまった。ここは、ブッダが最初に教えを説いた土地で、まさに仏教の始まった所である。そして、そのまさにここに興った仏教が日本にまで伝えられた。その仏教という、ブッダというつながりがなければ、ここには来なかったであろう自分を考えると、この土地はたいへん重要な場所であるとともに、ここは故郷であり、また今の私からして感謝したいような場所、起点なのである。

クシナガラについて、多くの学生は涅槃の地にふさわしい静けさに触れた喜びを述べている。

2回生C：

☆　たしかに霊鷲山のあの神秘さもよかった。しかし、やはり僕の中で一番印象に残ったのはクシナガラだと思う。あの静けさが僕には何とも言えなかった。そして、もう一つ、ささいな理由として、仏跡特有の日本人観光客目当ての、しつこく、そしてうるさいインド人がいなかった点もあるかも知れない。

3回生D：

☆　釈尊が侍者アーナンダにみとられて、沙羅双樹の間に横たわられて入滅されたのがこの地で、後にビルマの仏教徒が涅槃堂を建ててサーラの樹を植えました。その堂の中には大きな金色の釈尊の像が横たわり、とてもやすらかな眠りにつかれているようでした。涅槃像の上には美しい絹の織物がかぶせられていて、インド人の釈尊への尊敬の気持が伝わってきました。その周りも公園になっていて、散歩していると本当に心がやすらぎ、一瞬時間が止まったかのような感じさえしました。そこにはすごく安心感というようなものが漂っていて本当に快い気持になれました。

3回生A：

☆　ブッダが涅槃に入られたクシナガラに着く。かなりの田舎で、ものすごく静かである。ぐるっと歩いて見学にまわる。私はかなり遅くまで涅槃堂に残っていると、夕方の読経が始まった。すでに辺りは真っ暗で、その闇の中で僧が着ているオレンジ色の僧衣が映える。そして、一心に唱える読経がその静けさの中にこだましている。私は何となく「今なおインドに生きる仏教」のようなものを見た思いがした。

［4］

（a）

日本の高度成長時代に生まれ、経済的、物質的になに不自由ない贅沢な生活しか知らない学生たちは、貧しいインドに触れ、さまざまな思いを抱いている。これも、これからの日本を考えると、たいへん貴重な体験である。

3回生D：

☆　パトナ到着後バスでクムラハール遺跡を見学しに行きましたが、大雨のせいで発掘された所が池と化しており、一本柱が見えるだけでした。しかし、がっかりしている以上に驚かされたのは見学の間中まとわりついてくる子供達でした。裸足で服も着ていたり着ていなかったりの小さな子が、赤ちゃんを抱いて

物欲しそうな瞳で、「５ルピー、５ルピー」とか、とにかくお金をくれと言い続けながら、バスを下りてから乗り込むまで、べったりとついて来るのです。そしてバスに乗ればまた、大人や子供がバスの窓をたたき、「５ルピー」と叫ぶのです。見れば、その人達の体は細く、足も折れそうな程で、日本人と比較すると子供も大人もインドの方が小さい人が多く、着物も破れかかり袖がとれかかっていたりと日本ではほとんど見られなくなった光景でした。日本では物があふれていて、この人達のように悲しそうな目を見たことがありません。添乗員さんに一人にあげると皆が寄ってくるから無視するのが一番と聞いたので、がんばって無視していましたが、目が合ってしまうとすごく辛くて、この人達はずっとこれからも同じ生活を繰り返していくのだろうか、無視していればいいのだろうかと考えさせられました。日本では現在、人に物乞いをするのは恥ずかしいこととされていますが、インドでは当たり前のことで、添乗員さんにこの子達は決して貧しいわけじゃなく、もっと貧しい人々がいるのだと聞いて驚きました。

４回生Ａ：

☆　飛行機でデリーよりパトナへ向かう。最初の遺跡はクムラハールである。初めてだけに、物珍しい感じで見ていたのだが、遺跡よりもさらに驚いたことがあった。それは物乞いの子供達である。その子供は、誰かれかまわず外国人と見ると、手をさし伸べ、物欲しげに我々を見つめ、「ルピー、ルピー」と言ってくる。なかには、よく聞き取れない現地語で何かを言ってくる子供もいたが、だいたい何が言いたいかは、わかるものである。

私には５才になる姪と３才になる甥がいる。そういった年頃の子が、このインドという国では、見ず知らずの人、しかも外国人に物乞いをするのである。比較することではないのだが、どうしても、その姪や甥と比べてしまい、憐れみの念を抱いてしまうのだが、「何もしてはいけない、冷たく引き離さなければならないのだ」と自分に言い聞かせ、心に起こる葛藤を打ち負かさなければならなかった。非常に衝撃的な出来事であった。これからは、どこに行ってもこういう物乞いの子供達がいるというのである。心を鬼にして行かねばならない。

上記二人の学生は、物乞いをする子供を見たときのショックをリアルに書き、そのような子供に接して憐れむ気持ちとともに、お金を与えてはいけないという添乗員の言葉を考えて葛藤する率直な気持ちを表現している。

（ｂ）

レポートの最後に、どの学生も研修旅行をとおして考えたこと、体得したことをまとめている。

１回生Ｃ：

☆　私はインドへ行って数多くのことを学んで来たつもりだ。しかし、まだまだ学ばなければならない。私は仏門に入るつもりはないが、仏教は、自分の人生を考えるうえで一つの基本となるであろう学問であるので、これからも勉強せねばならない。

3回生E：

☆　インドで私は人間の原点、自然の摂理を見たといえる。仏跡をめぐって、今の講義、講読に役に立っていることは多い。先生方がインドの話をされるとすぐにその光景が目に浮かぶからだ。仏跡を見たことで釈尊や仏教に直接触れることができたことは私にとってもプラスになっている。

3回生C：

☆　今回、インド仏教遺跡研修旅行に参加して、学科、専攻が違うこともあって、仏教に対する知識を持たずに行って、仏跡の宗教性よりも芸術性に目が行っていた。宗教を全てに優越しているものと考える私にとって、このような形であったとしても、自分自身の宗教として宗教とはどのようなものかを学び、考えて、すこしでも自分のものと出来れば、この研修旅行に参加した意味があったように思われる。またこれから考えることも増えたように思う。

3回生A：

☆　今年は四大仏跡すべてを巡礼することができた。しかし、私は「何か」を確かめたかった。そして、それはまだよくわからない。その「何か」が自己であるのか、生きることであるのか…。そんな思いが、この二度の仏跡研修を終えた今も、私を再びインドへ駆り立てている。

3回生B：

☆　インド仏跡研修旅行をとおして学んだことは、私達の日本での生活が、いかに贅沢であるかということでした。そして、贅沢であるが故に、さまざまな迷いが生じ、さらに、より欲求を満たそうとして、それが達成できなければ、不満にかわっていくということの繰り返しの生活を、私達は、日々送っているような気がしました。それと同時に、私達が、日常忘れていること、つまり「生きる」ということが、どういうことなのかを、考え直させられました。

インド人の生活を見て、私は、「生きる」ということは、ただ毎日を生き続けることだけで、一日が終わっていると考えました。インド人にとっては、それが精一杯のことでも、私達から考えれば、なにか物足りないように感じるのです。しかし、実際、インド人は、そのように生きているのだから、私達の生活よりも、贅沢すぎて、不満だらけの生活よりも、インド人の生活の方が、「生きる」ことの本当の意味に、より近いのではないか、と考えました。

「生きる」ということについて、もう一つ感じたことは、インドの子供達の顔つきについてです。インドの子供は、体は子供でも、顔はみんな大人の顔を

していました。働いているのだから当然なのかもしれませんが、目つきも鋭く、殺気立っていました。それが、あまりにもリアルで、人間の顔とは、たとえ子供であっても、内面的なもので、変わってしまうのだと思いました。同じ人間とは、思えない程で、恐ろしかったです。

［5］

ここにはレポートの一部しか紹介できず残念であるが、すべてのレポートに学生の貴重なインド体験が綴られている。ここでレポートをとおして言えることは、仏跡研修旅行に参加した学生たちは皆、仏跡に詣でて、大きな感動を体験していることである。この感動は、若い学生にとってたいへん貴重な体験である。

現在の大学教育において、学生たちが大きな感動を抱くことが、どれだけあるであろうか。若くて最も感受性の鋭い時期に大学で4年間をすごす学生たちにとって、大学教育が何らかの感動を与え、それをもとにして勉学に精進したり、人生を考え、自己を見つめる機会を与えるべきである。ところで現在の大学の教育内容では、そのようなことは充分なされていないことを、われわれは反省しなければならない。その意味で、仏跡研修旅行での学生の感動体験を無駄にすることなく、大いに活用しなければならない。

学生の感動体験を、①「仏跡での感動」、②「感動体験をとおして何かを考える」、の二つに分けることができる。そのうち「仏跡での感動」とは、ブッダと結びついた感動とも言える。多くの学生は王舎城の霊鷲山頂に登って眼下に拡がる王舎城跡のジャングルを眺めながら大きな感動を覚えている。ブッダが2500年前に同じ場所で、同じ光景を眺めながら説法されたことを思い、時を超えて自分がブッダに出会ったような感動体験なのかも知れない。その他の仏跡における感動も同じである。「先生が、『君達は今、すごい所にいるのだよ』とおっしゃった時、はじめて今自分が立っている場所の重要さを感じました。」と、ブッダガヤーについて一学生が綴るのも、時間を超えてブッダに出会う感動体験であると言える。クシナガラの静けさに心打たれた学生も多いが、そこでブッダが入滅されたということと結びついて、その静けさが一つの感動になっている。

仏跡における学生の感動は、ブッダがここを歩かれた、ブッダがここで覚ら

れた、ブッダがここで入滅された、その同じ場所を自分も歩き、同じ場所に自分が立ち、そこから直接生まれた体験である。学生のこの貴重な感動体験は、仏教学科の教育に百パーセントその活用が可能である。まず、学生の感動体験をゼミや授業で発表してもらい、他の学生にもそれを伝えることは必要である。しかし、最も大切なことは、感動体験が仏教学の勉学に結びつくために、体験者自身に対する指導であろう。

ここに、仏跡での感動体験を学習に結びつけた学生Ｒの例を紹介したい。学生Ｒは筆者のゼミで学んでいた学生である。３回生の夏休みに大学のインド仏跡研修に参加することを決めた学生Ｒに、出発までに『釈尊の生涯』（水野弘元著、春秋社）と『大唐西域記』（水谷真成訳、平凡社）を読むことを勧めた。また、研修旅行には、『ブッダ最後の旅―大パリニッバーナ経―』（中村元訳、岩波文庫）を持参することにした。その経典の冒頭は、霊鷲山におられるブッダのもとに、マガダ国の阿闍世王が大臣を遣わし、ガンジス河北部のヴァッジ族を征服しようと欲していることを伝え、それについてのブッダの意見を聞くことから始まっている。そして経典の最後は、クシナガラでのブッダの入滅と舎利八分の出来事をくわしく伝えている。経典の冒頭の部分は、それが説かれた霊鷲山において、そして経典の最後の部分は、クシナガラにおいて読むように指導した。さらに、パーリ語を学習した学生であるので、その部分のパーリ語テキストを現地で読むために、そのコピーを準備させた。研修旅行から帰国して一週間目に研究室にやって来て、『ブッダ最後の旅』の冒頭の部分を霊鷲山で読むことは実行したが、『釈尊の生涯』は途中まで、あとは全く読まなかった、と言っていた。

10月中旬、学生Ｒのレポートを読むと、とくに霊鷲山における感動が綴られていた。面談して、とくに感動した仏跡を中心に話し合っているうちに、学生Ｒが自分から『ブッダ最後の旅』の冒頭に説かれているヴァッジ族の七不退法を調べて卒論テーマになるかどうか考えてみたいと言った。霊鷲山での感動とブッダが霊鷲山で語られた七不退法とが結びついたのであろうが、その後、学生Ｒは七不退法を伝えるいくつかの経典を調べ、内容の違いを見いだして、筆者のところにときどき質問に来た。３回生の終わる頃には七不退法を卒論テーマにすることを決めていた。

４回生の卒論テーマ決定のための指導は５月、６月に行うが、就職活動の時

期と重なることもあって、そのころまだ、ほとんどの学生は具体的に決まっていない。学生Ｒは、就職活動をしながら、七不退法の資料を着々と集めていたので、その段階ではほとんど指導する必要がなかった。

４回生には10月初旬に卒論の中間報告を提出させている。学生Ｒの中間報告では、他のほとんどの学生と同じように、内容はまだ不十分であった。就職活動では、最終面接までいったが、最後で決まらず、また一から活動しなければならない、と言っていた。

11月に何回かゼミの時間に卒論の中間発表をさせた。その段階で学生Ｒは、就職活動は後回しにして、卒論に集中することにしたと言っていた。中間発表もよくまとまっていた。

11月下旬から12月中旬にかけて、学生Ｒは毎週筆者の研究室に質問に来た。七不退法にはヴァッジ族の種族法と仏教教団のための七不退法とがあるが、そのほとんどの資料を集めて比較し、関係論文もほとんど目を通していた。質問に来るたびに、疑問点が次々と出てくるので、これもあれも調べなければならない、と言っていた。そのうちに、勉強が面白くなった、と質問に来るたびに言っていた。

１月に提出された卒業論文には別冊の資料編が付いていて、調べた七不退法をすべて記してあった。本論文の前半ではヴァッジ族と七不退法との問題を論じ、後半では七不退法の第五法と第六法について経典成立の新古をもとにした文献学的研究を行っている。たいへん評価できる内容であった。卒論の口頭試問が終わってから、学生Ｒは、３回生のとき参加した仏跡研修旅行で霊鷲山での感動がなかったなら、七不退法についてこれほど調べることはなかったろう、と語っていた。

学生Ｎの場合も３回生のとき仏跡研修旅行に参加し、仏伝から四門出遊を卒論テーマに選んだが、同じようにインドの仏跡での感動体験が卒論と結びついている。感動体験がなかったら、卒論にこれほど情熱を傾けることがなかったろう、と言っていた。

以上、二人の学生の例から、３回生の夏休みに研修旅行に参加した場合、次のような指導方法が考えられるのではなかろうか。

(1)　研修旅行出発前の準備は最少限にする。仏伝に関する書物を読むくらいで充分である。

(2) 仏跡の現地で読む経典の現代語訳を持たせる。

(3) 帰国後、感動体験の薄れない一カ月以内（10月中旬まで）にレポートを提出させる。

(4) レポートを読み、感動したところを中心にして本人と面談する。

(5) 感動体験と仏伝またはブッダの教えとの関連を面談で明確にして、感動のホットなうちにその部分の仏伝または教説を調べさせる。

(6) 調べた内容について面談して、卒論テーマをそこから自主的に見つけさせるように指導する。就職活動の始まる3回生の終わりまでに卒論テーマを決定する。

［6］

学生の感動体験を、「仏跡での体験」と「感動体験をとおして何かを考える」との二つに分けることができたが、後者の場合も前者と同じように教育における活用が可能である。

たとえば学生のレポートに、「仏教は、自分の人生を考えるうえで一つの基本となるであろう学問であるので、これからも勉強せねばならない。」「自分自身の宗教として宗教とはどのようなものかを学び、考えて、すこしでも自分のものと出来れば、この研修旅行に参加した意味があったように思われる。」「私は『何か』を確かめたかった。そして、それはまだよくわからない。その『何か』が自己であるのか、生きることであるのか…。」と綴られていることに注目したい。学生との面談で、自己とか、生きること、について話し合い、仏教ではどのように教えているかを学生に考えさせ、調べさせるヒントを指導すれば、卒論テーマに結びつくことも可能である。

以上、感動体験の教育的活用方法として、卒論テーマに結びつけることが最も効果的であると考えられる。しかし、卒論との関連でなくとも、感動体験を仏教の学習に結びつけるだけでも充分である。また、個人指導でなくとも、感動体験をもつ複数の学生を同時に指導することも可能である。